

第1部



活動報告：3年間のあゆみ

第1章 組織概要

① 設立年月日

2014(平成26)年4月1日

② 設立経緯

2010(平成22)年3月、本市の政策研究機関である新潟市都市政策研究所(注1)は「田園環境都市構想(注2)」を打ち出した。この構想では、豊かな田園環境と高度な都市機能を兼ね備えた本市の優位性を活かし、「田園環境都市」として持続的成長を目指すまちづくりが提言された。

2013(平成25)年3月、同研究所は田園環境都市構想の中で提示された5つの戦略課題の一つである「新潟みがきと対外発信」の具体化に向け、「潟」に関する調査・研究を行った。その結果、「潟は新潟のアイデンティティであり、都市の個性を象徴する存在」と位置付けるとともに、潟の価値の再発見・再構

築のための活用策の一つとして、潟の一体的活用を図るための潟担当組織や潟の拠点施設または仕組みの構築が必要であるとした。

それを受け、2014(平成26)年4月、潟に関する調査・研究、情報発信及び庁内外の関係者間の総合調整を行う機関として「新潟市潟環境研究所」(以下、研究所)が設立された。

現在、当研究所は、潟と人とのより良い関係を探求し、その魅力や価値を再発見・再構築することを目的に、学識経験者、地域の専門家、地域で活動している団体や市民の協力を得ながら調査・研究を進めている。

年 月	内 容
2007(平成19)年4月	新潟市都市政策研究所設置
2010(平成22)年3月	「田園環境都市構想」の提言(都市政策研究所)
2011(平成23)年3月	「新潟の湖沼『潟』」の提言(都市政策研究所)
2014(平成26)年4月	新潟市潟環境研究所設置

③ 主な役割

○潟の調査・研究

潟について、自然環境面だけでなく、歴史や暮らし文化、利活用や周辺整備など、潟に関して中立的、第三者的視点に立ち、総合的に調査・研究する。

○潟の情報収集・発信

研究所の活動内容、調査・研究成果のほか、潟にまつわる、さまざまな情報を発信する。

○ネットワークの構築

国、県、NPO等市民団体、大学、企業、専門家や庁内関係部署間と、潟に関する各種会議やそれぞれの活動を通じてつながり、意見交換や情報共有ができるような体制を構築する。

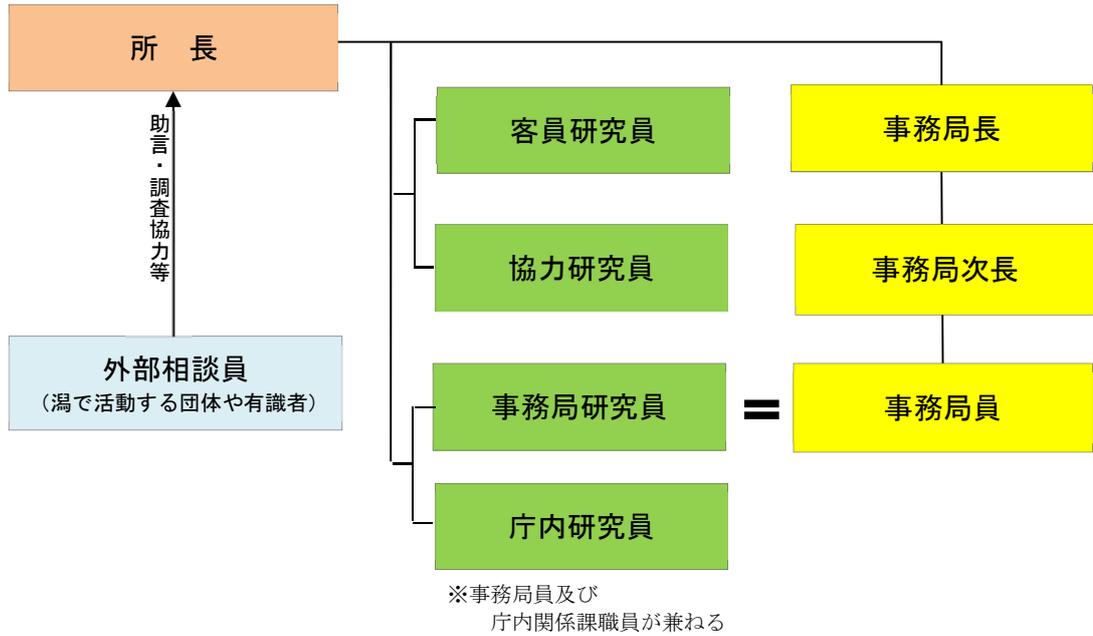
○窓口機能

潟の一体的活用を進めるための全体調整を行う総合的な窓口となり、潟関係者間の活動に資する。

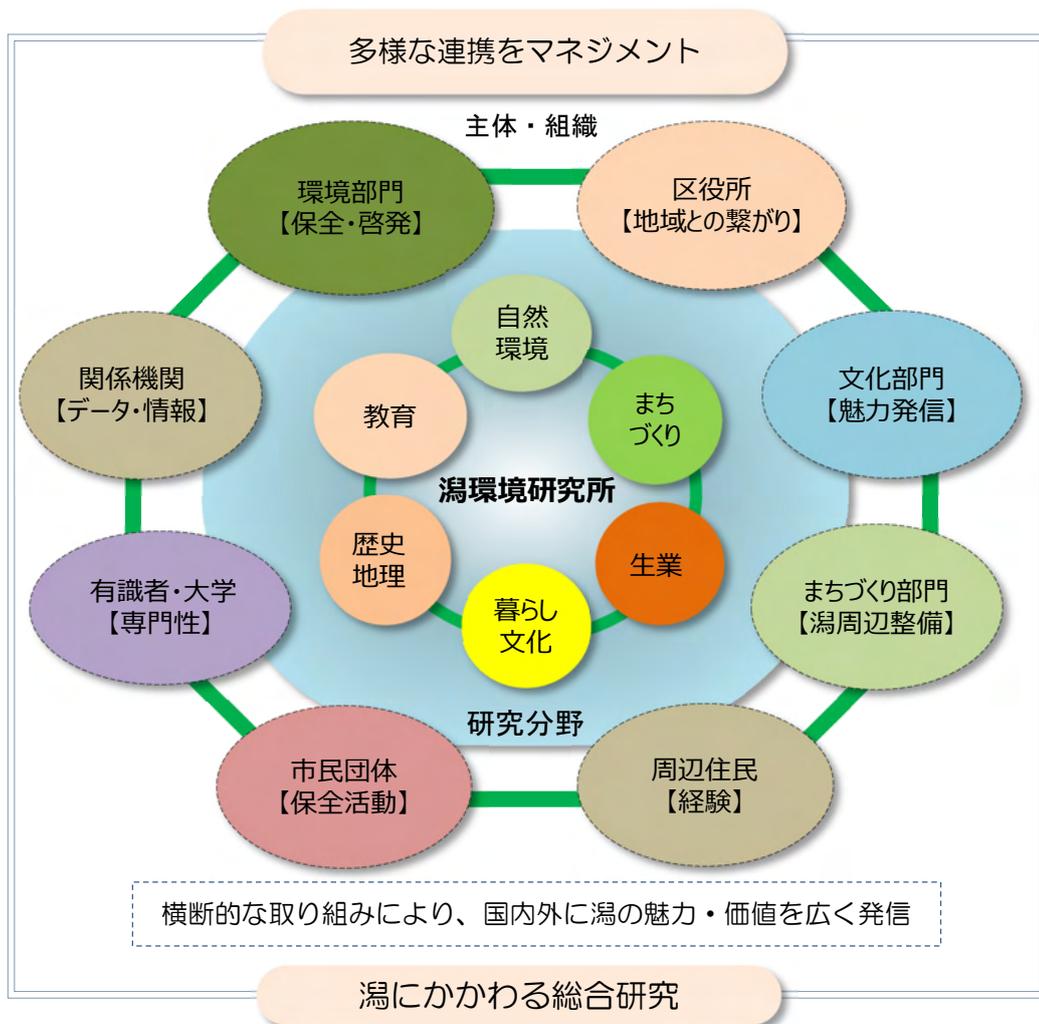
注1) 2007(平成19)年3月の本市の政令指定都市移行を機に、同年4月、自治体としての政策形成能力向上と戦略的都市経営の推進を目指して設立された。(平成19年4月～平成26年3月)

注2) 新潟市都市政策研究所が、平成19年度の設立から3年間の研究成果を踏まえ、平成21年度末にまとめた都市構想骨子。今後約10年間で取り組むべき5つの戦略課題(①都市連携、②ニューフードバレー構想、③公共交通再構築、④助け合いの新潟モデル、⑤新潟みがきと対外発信)が示されている。

④組織体制



⑤活動体制



渦環境研究所活動イメージ図

⑥ 研究所関係者一覧

	2014年度 (平成26年度)	2015年度 (平成27年度)	2016年度 (平成28年度)
所長	大熊 孝	大熊 孝	大熊 孝
客員研究員	吉川 夏樹 志賀 隆	吉川 夏樹 志賀 隆	吉川 夏樹 志賀 隆
協力研究員	井上 信夫 太田 和宏	井上 信夫 太田 和宏	井上 信夫 太田 和宏 高橋 郁丸
外部相談員	紙谷 智彦 小山 芳寛 齋藤 一雄 佐藤 安男 高橋 善輝 中島 榮一 宮尾 浩史 森 行人 山口 浩二 涌井 晴之	五十嵐 初司 大谷 一男 加藤 功 小山 芳寛 齋藤 一雄 佐藤 安男 清野 諄 高橋 剛 中島 榮一 松原 将 宮尾 浩史 村山 和夫 森 行人 山口 浩二 山崎 敬雄 涌井 晴之	五十嵐 初司 大谷 一男 加藤 功 小山 芳寛 齋藤 一雄 佐藤 安男 佐藤 讓 清野 諄 高橋 剛 中島 榮一 中村 忠士 松浦 和美 松原 将 宮尾 浩史 村山 和夫 森 行人 山口 浩二 山崎 敬雄 涌井 晴之 渡辺 重雄
事務局長	野島 晶子	水野 利数	水野 利数
事務局次長	佐久間 由紀恵	佐久間 由紀恵	小泉 英康
事務局研究員 (専任職員)	吉川 巨人 丸山 紗知 (自然環境・学芸員) 林 絢子 (民俗・学芸員)	吉川 巨人 丸山 紗知 (自然環境・学芸員) 隅 杏奈 (民俗・学芸員)	吉川 巨人 丸山 紗知 (自然環境・学芸員) 隅 杏奈 (民俗・学芸員)
庁内研究員 (兼務職員)	中島 正裕 (水と土の文化推進課) 八木 実紀 (水と土の文化推進課) 工藤 勇一 (環境政策課) 小林 博隆 (環境政策課) 堀之内 健治 (環境政策課) 藤井大三郎 (田園まちづくりアドバイザー) 横田 浩司 (市街地整備課) 横山 正人 (市街地整備課) 西脇 哲 (北区地域課) 伊藤 徹太郎 (中央区地域課) 渡辺 希 (西区地域課) 長倉 尚 (西蒲区地域課)	中島 正裕 (水と土の文化推進課) 八木 実紀 (水と土の文化推進課) 工藤 勇一 (環境政策課) 小林 博隆 (環境政策課) 阿部 秀人 (環境政策課) 藤井大三郎 (田園まちづくりアドバイザー) 横田 浩司 (まちづくり推進課) 横山 正人 (まちづくり推進課) 西脇 哲 (北区地域課) 家塚 剛 (東区建設課) 伊藤 徹太郎 (中央区地域課) 佐藤 瑛子 (江南区地域課) 落合 謙 (秋葉区建設課) 新井田 智 (南区地域課) 渡辺 希 (西区地域課) 長倉 尚 (西蒲区地域課)	中島 正裕 (文化創造推進課) 工藤 勇一 (環境政策課) 小林 博隆 (環境政策課) 阿部 秀人 (環境政策課) 藤井大三郎 (田園まちづくりアドバイザー) 野沢 博志 (まちづくり推進課) 佐久間洋平 (まちづくり推進課) 坂井 潤市 (公園水辺課) 西脇 哲 (北区地域課) 阿部 和博 (東区建設課) 伊藤 徹太郎 (中央区地域課) 佐藤 瑛子 (江南区地域課) 大野 雅道 (秋葉区地域課) 新井田 智 (南区地域課) 渡辺 希 (西区地域課) 長倉 尚 (西蒲区地域課)

※在任・在職期間にかかわらず掲載

第2章 活動記録

調査・研究活動

(1) 大学・専門家と連携した調査・研究

当研究所では、専門性の高い見地から調査・研究を進めるため、大学や各分野の専門家との連携を図っている。

客員研究員として、新潟大学の准教授が、潟の水質改善や水生植物相の変遷など、継続的な調査・研究を行うほか、協力研究員として、潟に関係する生物多様性(魚類)、歴史、民俗の専門家が、各自のテーマに基づいた、継続的な調査・研究を行っている。

①客員研究員

■吉川 夏樹 (NATSUKI YOSHIKAWA)

《プロフィール》

1970年東京生まれ

新潟大学農学部准教授

専門/農業水利・農業土木



博士(農学)、専門は農業水利学、農業土木学。「田んぼダム」による水害抑制と水質改善、水田を介した放射性セシウムの挙動など、農業に関わる水の研究を多岐にわたって行う。

《潟環境研究所での研究テーマ》

- 田んぼダムによる潟の水質改善に関する研究
- 潟および周辺水域における土砂堆積量及び生物資源量観測システムの開発

《主な研究成果》

【平成26年度成果】

「田んぼダムによる水質改善に関する研究 (水田からの流出抑制効果の検証を中心に)」

鳥屋野潟をはじめとしたいわゆる閉鎖性水域では、農地から流出した土砂が堆積し、治水機能の低下や水質汚濁に伴う富栄養化の進行が問題となっている。

こうした問題に対して鳥屋野潟では、定期的な浚渫や非灌漑期の浄化用水の導入によって対策を講じてきたが、いずれも大きなコストを経常的に生じさせ、自治体の財政的負担となっている。

そこで、平成26年度の研究では、安価で即効性のある対策案として田んぼダムに着目した。田んぼダムとは、水田の排水口に孔の大きさを縮小する仕掛けをして流出量を調整するので、豪雨時の雨水を一時的に水田に貯留する取り組みである。洪水緩和が主な目的だが、水田からゆっくりと排水するため、代かき時や豪雨時の土砂流出を抑制する効果があるので

はないかと考えた。

本研究では、亀田郷流域内に設けた8区画の試験水田を使って、田んぼダムの有無による代かき落水、中干し落水、大雨時の排水イベントの際に流出する土砂量の測定と鳥屋野潟への土砂流入量の観測を行った。

観測の結果、田んぼダムを実施すると水田からの土砂流出量が代かき落水時で80パーセント、中干し落水時で76パーセント縮減できることが明らかになった。また、富栄養化物質の一つである全リンの流出も代かき落水時で76パーセント、中干し落水時で48パーセント減少した。

以上の結果から、田んぼダムの土砂流出抑制対策としての可能性が明らかになった。

【平成27年度成果】

「田んぼダムによる水質改善に関する研究 (鳥屋野潟の土砂堆積シミュレーションを中心に)」

平成26年度の研究で明らかになった土砂および全リンの抑制効果に基づいて、鳥屋野潟における土砂堆積軽減の効果を検証することを目的とした。

検証にあたっては、鳥屋野潟の土砂堆積現象を再現する二次元河床変動モデルを構築した。2014年12月1日～2015年11月30日までの鳥屋野潟の堆積土砂量を計算した結果、流入河川と流出河川で観測した土砂の輸送量の差と計算結果がほぼ一致し、この年の堆積土砂量は約1,200立方メートルであることがわかった。

このモデルを用いて、亀田郷の全域の水田を田んぼダムとした場合のシミュレーションを実施した結果、約1/4にあたる27パーセントの土砂堆積を抑制することが明らかになった。

こうしたことから、田んぼダムは、現在定期的に行われている浚渫にかかるコストを大幅に縮減することが可能であるといった結果が得られた。

【平成28年度成果】

「潟および周辺水域における生物資源量および土砂堆積量観測システムの開発」

これまでとは方向性の異なる研究を試みている。

発端は、平成27年度の研究で、鳥屋野潟の土砂堆積量を超音波装置で計測した際に、船頭付きボートでは頻繁な調査が困難であると感じたことである。

船頭の都合や天候によりタイミングよく調査ができないことに加えて、ポータブルGPSを使った経路の指示では、高い精度で同一経路を辿る複数回の調査が困難であった。

そこで、自律航行型のラジコンボートによる調査手法の開発を着想した。着想時は湖床の変動を観測することが目的で

あったが、高周波数の超音波装置を用いると水中の魚類が観測できることがわかり、生物資源量を同時に把握できる「自律航行型的水上版ドローン」を開発することにした。

水上版ドローンは、浮体として利用したボディボード上にエアポート、GPS アンテナ、小型コンピュータ、WI-FI アンテナおよび超音波装置を搭載したものである。

事前に登録した経路を、GPS を使って自律的に航行する事ができる超音波装置には、医療用の超音波診断装置を利用した。周波数がMHz 帯域であることから、高解像度の映像が取得できる点に特徴がある。

これまでに試作機(図)を作成し、実験水路や池を使って、実用面での課題の抽出を行った。

これが完成すれば、湖床の変動を頻繁に測定することができることはもちろんのこと、潟やそれに繋がる河川・水路の生物資源量を環境に攪乱を与えることなく網羅的に把握することができるようになることが期待できる。

【今後の課題・展望】

自律航行型的水上版ドローンの開発を継続し、実用に供する装置の完成に漕ぎ着けたいと考えている。

同時に、大熊所長からご依頼のあった「鎧潟の異常豪雨時の洪水調節機能と生態保全的利用」についての検討を進めていきたい。

研究テーマが多岐にわたり、各テーマの深度を深めることも必要と考えているが、近未来の新潟県の潟のあり方について新たな視点から研究を進めていきたい。



図：水上版ドローンの試作機

■志賀 隆 (TAKASHI SHIGA)

≪プロフィール≫

1978年長岡市生まれ
新潟大学教育学部准教授
専門／植物分類・保全生態



博士(理学)、専門は植物分類学・保全生物学。水辺の植物の多様性や生き様を調べる一方で、日本の豊かな水辺の植生を残すための研究を進める。

≪潟環境研究所での研究テーマ≫

- 新潟市域の湖沼における水生植物の生育状況と埋土種子集団の構成

≪主な研究成果≫

【平成26年度成果】

「掘削地の植物相調査と土壌撒きだし試験による福島潟の埋土種子集団の解明」

水生・湿生植物の植生帯の埋土種子を用いた植生復元の可能性を探るために、福島潟に造成された掘削池の植物相を調査すると共に、福島潟の土壌を収集し、撒きだし試験を行った。植物相調査の結果、掘削池では48科148種の維管束植物の生育が確認された。また、絶滅危惧種は9種(オニバス、ミズアオイ、オオミクリ、ナガエミクリ、オニナルコスゲ、ツルアブラガヤ、マツモ、ミズタガラシ、キクモ、ガガブタ)が確認された。撒きだし試験では16科29種の発芽を確認した。これらは過去に分布が確認された種であったが、土壌採集時の地上部植生の構成種とは異なるものであった。

本研究より、土壌を掘削し湿地環境を復元することで、失われた植物の群落が埋土種子より回復する可能性が示された。

【平成27年度成果】

「鎧潟干拓地の水生植物相と埋土種子集団の構成」

越後平野における埋土種子を用いた植生復元の可能性について検討するため、乾田化された鎧潟干拓地(新潟市西蒲区)を調査地として、植物相調査と埋土種子構成種を把握するための土壌の採集を行った。

鎧潟干拓地において確認できた水生植物は水田では9種、水路では23種であった。干拓前の1946年～1967年に確認、採集された水生植物は72種であったが、本調査で確認された水生植物の種数は16種であり、大幅に減少していた。

その一方、イヌホタルイ、ミゾハコベといった水稲除草剤に抵抗性がある植物が新しく確認された。生育形別に計数した場合、浮遊植物以外の水生植物が減少しており、浮葉植物はほとんど失われていた。これは、鎧潟干拓地内から、ある程度の水位がある止水環境、土壌が厚く堆積した環境が失われたためと考えられる。

【平成28年度成果】

「新潟市域の小規模湖沼における水生・湿生植物相と水生植物の簡易採集法の評価」

新潟市域の水生・湿生植物相の全貌を明らかにするために、調査が不足している新潟市内の11の小規模湖沼の水生・湿生植物相を調査した。

植物相調査の結果、11湖沼において水生植物は47種、湿生植物は75種確認された。ここに大型湖沼の近年の調査記録を含めると、新潟市域の湖沼には現在、水生植物84種、湿性植物139種が生育していることが明らかになった。小型の11湖沼では絶滅が危惧される水生・湿生植物は13種、小型湖沼でのみ確認された在来種は21種確認された。新潟市域の湖沼の生物多様性を守っていくためには、小型湖沼の保全も必要であることが示されたといえる。

また、上記研究に加えて、松浜の池において簡易採集器による調査を行い、水生植物相や生物量をどの程度把握できるのか評価した。

【今後の課題・展望】

3年間の調査によって新潟市域の湖沼における水生・湿生植物相の現状がおおよそ明らかになった。また、かつて湿地だった環境において埋土種子が部分的にも残されている可能性が示された。新潟市域の16湖沼には126種（外来種率 10.3パーセント）の水生植物がこれまで記録されているが、既に絶滅した可能性がある種は41種（外来種率 4.9パーセント）にも上る。

これからは、新潟市域の現状の湖沼生態系を保全し、植物相を記録していくことに加えて、植生復元や種の遺伝的多様性を回復させる取り組みが必要である。水湿地そのものを復元することも積極的に検討していく必要があるだろう。

そこで、以下の4点を今後の課題としたい。

- 1) 新潟市域で採集された水生・湿生植物の標本や文献記録の整理
- 2) 水生植物の遺伝的多様性のモニタリング
- 3) 在来植生に影響を与える外来水生植物に関する調査研究
- 4) 新潟市域の湖沼および干拓地における埋土種子集団の把握と埋土種子を用いた植生復元に関する実践的研究



福島潟と掘削されてできた池
点線で囲まれた部分の池が調査地点



発芽試験の様子



鎧潟干拓地の調査地点（赤点部の水田）

②協力研究員

■井上 信夫 (NOBUO INOUE)

◀プロフィール▶

1949年山形県生まれ

生物多様性保全ネットワーク新潟

専門／生物多様性・魚類



生物多様性保全ネットワーク新潟など、県内の環境 NGO の役員を務め、外来生物対策や希少生物保護活動、自然体験活動を企画運営。

◀潟環境研究所での研究テーマ▶

- 越後平野の主な湖沼における魚類相の調査および越後平野における淡水漁業と魚食文化、および外来生物対策についての研究

◀主な研究成果▶

【平成 26 年度成果】

「越後平野の魚類相」

これまで確認された淡水魚（汽水・海水魚を含む）の、生活史、原産地を区分し、干拓で消滅した鰹潟を含む代表的な6湖沼の魚類相を概説した。

既存資料や聞き取り情報を含む確認種67種のうち、41種・63パーセントは純淡水魚が占め、海洋と往来する回遊魚は15種、汽水・海水魚は10種である。

魚類の導入は古くから行われ、純淡水魚41種のうち22種・54パーセントが本来当地には生息しなかった国内外からの移入種である。一方、多くの在来魚種が絶滅、減少し、19種が新潟市レッドリストに掲載されている。越後平野の主たる湖沼では国内・国外外来魚が増加を続けているが、魚類相は単調なものになっている。

【平成 27 年度成果】

「上堰潟の魚類相」

上堰潟は一度かんがい排水事業で干上がったあと、角田山麓東部の水田地帯の水を集める遊水池として整備された。魚類相については断片的な情報しかなかったが、現地調査で17種の魚類が確認された。そのほとんどが純淡水魚で回遊魚はハゼ科3種にとどまったが、降海していない可能性が高い。

上堰潟も例にもれず外来魚が占める割合が高く、10種・59パーセントを占め、採捕個体数では76パーセントを占めた。他の水生動物では、クサガメ 228 個体とアカミミガメが捕獲されたが、いずれも外来種である。流入水路では外来種のタイワンシジミのほか、希少な在来種のマシジミが確認された点が注目される。

【平成 28 年度成果】

「じゅんさい池の歴史と現状」

市内に残された数少ない砂丘湖「じゅんさい池」の環境は、周辺の宅地開発や都市公園化などにより、半世紀ほどの間に急激に変貌してきた。希少な自然も残されているが、ペットや園芸植物の無秩序な持ち込みが行われ、動植物生物相が急激に変化している。じゅんさい池公園は東区役所建設課が管理しているが、地元市民団体も保全活動に取り組んでいる。

中地区コミュニティ協議会や東山の下小学校の総合学習に協力しながら、じゅんさい池がたどってきた経緯、これまでの活動で得られた観察会の結果を整理し、今後の整備や利活用のあり方についても提言を行った。

【今後の課題・展望】

越後平野の湖沼の多くは干拓により消滅し、河川・海洋と遮断されてきたが、現在でも埋め立てや水質汚濁の危険にさらされている。さらに、意図的な放流やペットの遺棄・逸出により、水面下で外来生物への置き換わりが急速に進行している。その実態を整理し、広く市民へ伝えて意識の変革を図ることが求められている。そのためには、湖沼の外来種リストの整理と広報活動、市民参加による外来種対策の取り組みを進めて行くことが必要である。地元住民や環境 NGO、地域の学校との連携をはかりながら、当面は都市公園を中心に顕在化している園芸スイレンや外来カメ類、急増している錦鯉の遺棄等をテーマに活動を進めていきたい。

越後平野の各湖沼で営まれてきた漁労は、潟端の暮らしを支え、近郷の食を支える重要な生業であった。戦後の高度経済成長期以降、急速に食文化が変化し、回遊魚や汽水・海水魚などの重要な魚種が失われた結果、漁労文化はほとんど消滅状態となっている。漁業協同組合が存在する3潟でも、伝統漁法の継承者は数えるほどしか残っていない。これまで民俗資料としての漁具の収集、調査は行われているが、過去～現在の魚類相の変遷をたどりながら、自然科学の視点から改めて潟の漁労文化を記録したい。



北米原産のアカミミガメ（じゅんさい池）

■太田 和宏 (KAZUHIRO OTA)

≪プロフィール≫

1984年新潟生まれ
赤塚中学校地域教育コーディネーター
専門／歴史調査、建物



地域教育コーディネーターや赤塚・佐潟歴史ガイド副会長を務めるほか、佐潟と歩む赤塚の会などで、西区佐潟で保全・イベント活動が続けながら、人と自然の共存の在り方を日々模索している。

≪潟環境研究所での研究テーマ≫

○潟関係史料の内容調査及び潟周辺集落の構成に関する研究

≪主な研究成果≫

【平成26年度成果】

「新潟市西区に関する潟と人の共存（里潟）について」

西区内の潟の状況を、新潟市史・絵図などから調べた。潟の位置、おおまかな形状を地図上に示し、1820年前後当時の西区の状況を再現した。

佐潟の利用方法について、地域に残る史料をもとにその内容を紹介するとともに、地元住民から昭和の佐潟について聞き取りを行った。

【平成27年度成果】

「『山当て』による潟と

その周辺集落の“鎮め”について」

福島潟、鳥屋野潟、佐潟、上堰潟周辺の集落と潟が、風水上どのように関係しているのか、「山当て」と呼ばれる手法を用いて、その関係性を発見することができた。潟周辺の集落に点在する社寺が、意図的に配置され、潟を鎮めることに用いられた。

それぞれの潟を「山当て」の手法で、それぞれの特性を探り、図でそれを示した。

【平成28年度成果】

「赤塚地域における地域教育

～潟を活かした地域教育の事例として～」

赤塚中学校における「地域と学校パートナーシップ事業」の活動の中で行っている地域教育の一環として、潟に関する活動を行っている。潟を中心に、潟を取り巻く赤塚地域の特性、活動する諸団体などをパートナーシップ事業としてどう活かしているか紹介する。

そして、赤塚中学校のパートナーシップ事業における地域住民の“学びの拠点づくり”活動についても紹介し、地域住民

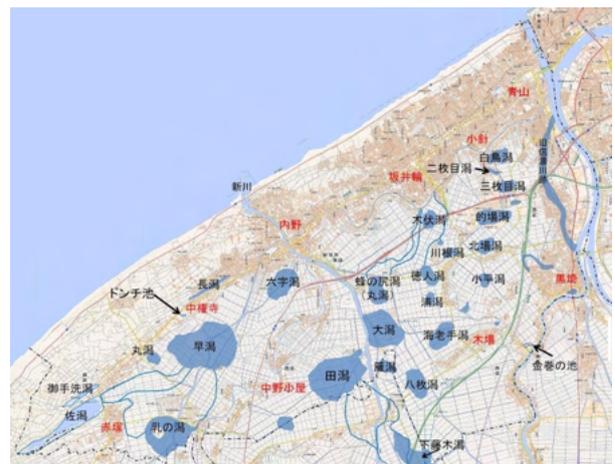
自身の”地域教育“と潟について触れる。

また、地域住民による新しい潟の魅力の発信について、その取り組みを紹介する。

【今後の課題・展望】

既存の潟の外観利用（レクリエーション、景色を楽しむ等）から、内面利用をどう進め、広めて行くか。ワイズユースを新潟市内の潟全体として推進することが重要と思われる。既存の取り組みと、ワイズユースの取り組みも合わせて、県内・国内・世界へと発信し、多くの人々が潟に訪れ、現地の人々と触れ合い、ワイズユースでどのようにして地域にお金が落ちるか、という仕組みを今後模索していくことも重要で、その関係性を作ることによって潟の保全につながり、ラムサール条約の理念に沿う形となるのではないだろうか。

これら佐潟における新しいワイズユースを模索する研究・取り組みを、地元有志・大学などと連携して今後進めていきたい。また、従来と同様に、潟に関係する歴史的史料の調査も進めたい。



1820年前後の西区の潟の位置と形状



越後平野 地形と街道屏風絵図

■高橋 郁丸 (FUMIMARU TAKAHASHI)



《プロフィール》

1961年新潟市生まれ
新潟県民俗学会理事
専門／民俗学

新潟県内で探訪活動を続け、祭礼や口承伝承を調べている。現在は老若男女が親しみを持つ「妖怪」の情報も調べている。

《潟環境研究所での研究テーマ》

○潟や水辺にまつわる伝承の調査及び信仰の研究

《主な研究成果》

【平成28年度成果】

「潟の伝説と民俗」

潟環境研究所の協力研究員として平成28年度に加わり、まず、市町村史などの書籍に載る記事をチェックした。改めて調べてみると生業などはとり着きやすいが、伝説は詳しく読み込まないととり着くことができない。まだまだ発掘することができるのではないかと考えている。

平成28年度は、書籍調査では、潟の伝承になかなかとり着けないことから、水にまつわると思われる行事をいくつか尋ねた。

まず7月2日、西蒲区針ヶ曾根の河童祭りの伝承地を訪ねた。たった一軒のお宅が長年守り続けていた祭りで、伝承者がすでにご高齢であり、祭りの支度も大変とのことであった。伝承を遺していくことの厳しさを目の当たりにした。

8月19日には、西蒲区角田浜の妙光寺で行われている七面天女の祭礼を訪れた。かつて、海岸線が迫っていたと思われる岩穴の中での祭礼は、この岩穴に潜んでいたという七面大蛇（大蛇が天女となる）が何であったのか、考えさせられる祭礼であった。同21日には西蒲区馬堀の首祭りを訪れた。この祭りは馬堀用水を計画し、用水を作ったことによって命を落としたという馬堀の名主、田辺小兵衛の法要である。小兵衛は首をはねられ、その首が飛んで役人が細工した羽目板をくわえて飛び上がったという話が残るが、果たしてそれは何を意味しているのか。

11月7日には小須戸の本住寺の御会式・蛇頭御開帳を訪れた。本住寺のあたりにはかつて鎌倉潟という潟があり、この潟を干拓したときに潟に住んでいるであろう主に向かい、この地の開発を懇願したといわれている。法要で御開帳される蛇頭様という大蛇の頭蓋骨と伝えられているものは、直接的にはその大蛇であると語られていないが、潟がなくなり美田に変わったということは、主が鎌倉潟を去ったことを意味しており、法要で御開帳される蛇頭様は潟を人々にゆずったからこそ今も手厚くまつられているのだと思われる。

これらの祭礼を訪れて思うことは、人間の命には限りがあり、どんなに強い思いがあったとしても一人の人間では思いの力も限りがあるということだ。家に強い力があり、先祖に起こった出来事を伝承して子孫に伝えていこうと思っても、これだけ情報にあふれている世の中では歴史ある伝承も埋没していく。

しかし、地域で伝えている伝承は地域の歴史を大切にすると人たちが結束して伝承を残す。それでも、地域の力が弱まってくると、地域の伝承も埋没してしまう。今年訪れた祭礼地は寺院が寺の行事として伝えているものが多かった。寺院や神社は宗教的な施設ではあるけれども、少なからずその地域の物語を伝える大切な場所であると実感した。社寺はその土地に存在した長い年月の間にこのような役割を担うようになったのだろうか。

【今後の課題・展望】

馬堀の首祭りだが、西蒲区曾根にも同様の伝承を持つ高橋源助の首塚がある。このような伝承を残す用水路の建設は、どれだけ人々の生活に影響を及ぼすものであったのか、人々は厳しい自然の中で、どのように生きてきたのか考えさせられる。この祭りについてはもう少し追ってみたいと思っている。本住寺の蛇頭様も本来は近くのお堂で祀られていたようなので、もしまだそちらのお堂での祭礼が残っているのならば、調べてみたい。

水害や治水で命を失った人、また人にあらざるものたちが、地域でどのように扱われてきたのか探してみたい。

また、それらの供養におもに寺院が関わっていること、かつて井戸を埋めるときには祭や呪いを行っていたが、潟や川自体を生命体として鎮めようとした事例がないか調べてみたい。



西蒲区馬堀の首祭り

(2) ラムサール条約登録湿地に関する現地調査

国内のラムサール条約登録湿地の状況、湿地関係施設及び地域の活動について、7つの湖沼で現地調査を実施した。

①滋賀県（琵琶湖）

○琵琶湖 登録：1993（平成5）年6月／国内9番目
滋賀県の中央部に位置するとともに、日本のほぼ中央に位置する日本最大の淡水湖。所在地として10市の自治体が関係する。

1993（平成5）年6月に、日本国内で9番目のラムサール条約湿地となり、2008（平成20）年10月には西之湖が拡大登録された。毎年、コハクチョウ、ヒシクイなどの渡り鳥にとって重要な越冬地となっている。

○琵琶湖博物館

琵琶湖博物館は、「琵琶湖のおいたち」や「人と琵琶湖の歴史」という常設展示などがあり、質量ともに充実している。

外国人を含む三十数名の学芸員による調査・研究活動のほか、ボランティアによる館内解説、フィールドレポーターやはしかけ制度、博物館セミナー・体験学習など、市民参加による多彩な活動を進めていた。



館内の展示

②石川県（片野鴨池）

○片野鴨池 登録：1993（平成5）年6月／国内8番目
石川県の南西部の加賀市にある淡水の池。鴨池には、毎年11月から3月にかけて、数千羽のマガモ、トモエガモ、マガン、ヒシクイなどが渡り鳥の中継地、越冬地として訪れる。

鴨池周辺は原則禁猟であるが、全国でも数か所にしか残っていない投げ網猟のひとつ「坂網猟」は解禁となっており、この伝統猟法は1688年頃から今日にいたるまで続いている。カモを一度に取り尽くさず、必要な分だけ捕獲するしくみになっているため、持続可能な猟法であり、ラムサール条約の基本理念であるワイズユースの一つの例となっている。



片野鴨池（上）と説明看板（下）

○加賀市鴨池観察館

「加賀市鴨池観察館」には、自然解説や調査を行うレンジャーが常駐している。

鴨池の保全を効果的に進め、今後も持続可能な利用を続けて行くために、片野鴨池に関わる関係者や住民が連携及び協働し、意見交換や進路調整をする組織として「片野鴨池周辺生態系管理協議会」を設立し、片野鴨池とその周辺の生態系・文化・経済・教育・観光を含む包括的な管理を進めている。



館内の展示

③宮城県（伊豆沼・内沼、蕪栗沼・周辺水田、化女沼）

伊豆沼・内沼、蕪栗沼・周辺水田、化女沼の3か所は、その位置関係から、仙北平野の「ラムサールトライアングル」と呼ばれている。登録湿地がこのような、近接していることは、世界的にも大変珍しく、重要な地域であることをアピールしている。水鳥や湿地の恵みを利用した農業・観光・環境教育などワイズユースが図られている。

○伊豆沼・内沼

登録：1985（昭和60）年9月／国内2番目

宮城県の北西部、北上川の支流の迫川の沖積平野にある大小2つの淡水沼。あわせて559ヘクタールが1985(昭和60)年に登録された。

冬になると多くの渡り鳥がおとずれる。日本で越冬するマガンの80パーセント以上、オオハクチョウ、コハクチョウが利用する国内最大級の越冬地。

登録は宮城県の主導により行われた。登録から30年以上経つが、地元への関心はあまり高いと感じられないとのことである。

○宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリーセンター

宮城県、旧若柳町（現栗原市）、旧築館町（現栗原市）、旧迫町（現登米市）が出資して財団が設立され、1991(平成3)年に「宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリーセンター」が開館。年間3～4万人の来館者がある。

伊豆沼・内沼の歴史や人と自然のかかわりに関するパネルや標本、研究員による研究成果などの展示がみられる。研究・調査事業では成果を報告書にまとめるほか、ボランティアがブラックバスの繁殖抑制を中心とした駆除活動を実施するなどセンターの活動に関わっている。



センター外観（上）とセンター内の展示（下）

○蕪栗沼・周辺水田

登録：2005（平成17）年11月／国内19番目

宮城県北部を流れる北上川の支流、迫川の流域にある遊水地機能をもった堰止め湖の蕪栗沼と、沼と密接な関係にある周辺の水田地帯がひとまとまりの湿地生態系としてラムサール条約登録された。

毎年、冬になるとガンカモ類3万羽以上が渡来する。登録に至るまでには周辺農家の反対があったが、NGO が農家に理解を得るため、渡り鳥による付加価値の提案などのメリットを検討した。行政は「ふゆみずたんぼ（冬期湛水）交付金」を実施

するなどし、次第に蕪栗沼の重要性が理解されていった。

○おおさき生きものクラブ

「NPO 法人蕪栗ぬまっこくらぶ」、「NPO 法人たんぼ」などの団体による環境保全活動が盛んに行われるとともに、大崎市と連携しながら自然教育の取り組みが行われている。

大崎市は2013(平成25)年に「おおさき生きものクラブ」を設立し、市内6つの環境保全団体と協働で市内の小中学生向けのプログラムを作成し、実施している。地域の良さを理解してもらうため、地域にいる生き物に触れさせることを重視している。



マガンの飛び立ちと案内看板（上）
大崎市職員に説明を受ける様子（下）

○化女沼 登録：2008（平成20）年10月 国内35番目

宮城県大崎市の中心部から北西約5キロメートルにある化女沼は、田尻川の洪水調整と灌漑用水用の周囲約4キロメートルのダム湖であり、マガンやヒシクイをはじめ多くの水鳥が飛来する。亜種ヒシクイは日本全体の80パーセントが飛来する。

ダム湖としてはじめてラムサール条約登録された。登録については、地元の猟友会も関心を持ち、地元からの反対は無かった。

○化女沼観光資料館

ダム堤南東端のダム管理事務所に、観光資料館が併設され、「NPO 法人エコパル化女沼」が管理している。

活動としては、外来魚の調査や動植物の調査を実施。環境教育事業としては山菜を食したり、ヒシの実、ハスの実、きのこ採集をしたりと、化女沼周辺地域の自然環境を学ぶイベントも開催している。



化女沼観光資料館（左）



NPO 法人エコパル化女沼から説明を受ける様子（右）

④北海道（宮島沼・ウトナイ湖）

視察先の湖沼ではラムサール登録に際し、住民の反対など大きな障害となる事例は確認されなかったが、保全活動などを通じて機運を高め、登録につなげている。

住民との話し合いによる意思疎通や期待感の高揚、自然を楽しむ、共通ブランドの立ち上げなどラムサール条約の登録による利点を検討していくことが重要であることがわかった。

○宮島沼 登録：2002（平成14）年11月 国内13番目

宮島沼は、札幌市の北東50キロメートルの美唄市の西に位置し、面積41ヘクタールの丸い形をした淡水湖。

秋と春にはガンやカモ、ハクチョウなどの水鳥が訪れる国内でも重要な渡り鳥の中継地である。

ラムサール条約登録に向けては、地元でワークショップを重ね機運の醸成を図った。

結果としてラムサール条約登録がツールとなり何か進むのではないかとの期待感が高まった。

○北海道宮島沼水鳥・湿地センター

ラムサール条約登録後、2006(平成18)年に完成した「北海道宮島沼水鳥・湿地センター」では、湖底の浅底化や環境の悪化といった諸問題も含め自然環境の保全活動に取り組んでいる。

道内では全部で13か所ラムサール条約湿地への登録地があるが、道内でネットワークを形成し、情報交換や子ども交流などを行うほか助成金の受け皿にもなっている。



北海道宮島沼水鳥・湿地センター内の展示

○ウトナイ湖 登録：1991（平成3）年12月／国内4番目

ウトナイ湖は、北海道の南西部、苫小牧市の東部郊外、美々川下流の沖積平野に広がる淡水湖。

日本有数の渡り鳥の越冬地、中継地で毎年マガン、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウなど数万羽が飛来する。周辺の樹林帯はオジロワシ、オオワシの越冬地にもなっている。

ウトナイ湖では漁業権が設定されており、スジエビ、コイ、ワカサギ、ナマズなどが捕れる。

1981(昭和56)年に日本野鳥の会が日本初のバードサンクチュアリを設置し、活動の下地があったことから、登録に関しては、市民からの反対もなく早い段階で登録できた。

なお、千歳川放水路という一大計画があり、ウトナイ湖周辺を通過する予定であった。しかし、1999(平成11)年、放水路計画は中止された。

○ウトナイ湖ネイチャーセンター

／ウトナイ湖 野生鳥獣保護センター

「ウトナイ湖ネイチャーセンター」は1981(昭和56)年に設置され、年間約6,500人の利用がある。

「ウトナイ湖野生鳥獣保護センター」は、2006(平成18)年に環境省が設置し、苫小牧市が運営・維持管理を行う。

年間約150頭の鳥獣類を保護収容している。これらの施設は保護と情報発信の活動が中心である。



ウトナイ湖ネイチャーセンター内の展示（上、右下）
センター職員に説明を受ける様子（左下）

(3) 新潟市の「潟」(湖沼)に関する市民意識調査

①調査概要

現在の市民の「潟」への認識や潟とのかかわりを世代ごとに探るため、潟に関する市民意識調査を実施した。

【調査項目】

- 対象者の属性
- 潟(湖沼)に関する意識や経験について
- 潟(湖沼)に関する保全意識や整備について
- 潟(湖沼)に関する研究活動について

【調査の設計】

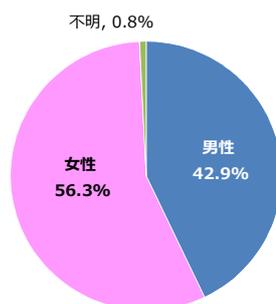
- 調査地域：新潟市全域
- 調査対象：新潟市に住民登録がある満20歳以上の男女
- 対象者数：2,000人
- 抽出方法：無作為抽出法
- 調査方法：郵送法（配布・回収とも）
- 調査期間：平成27年7月2日～8月8日

【回収結果】

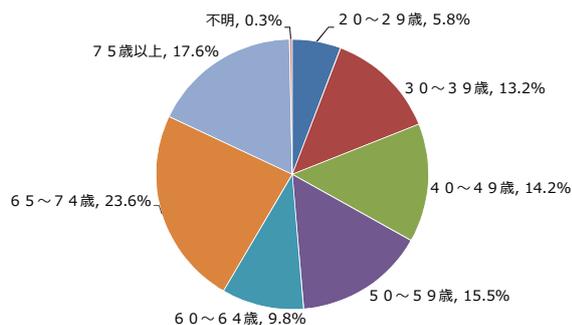
有効回収数 902人(回収率 45.1パーセント)

【回答者の属性】

●性別



●年齢



●居住地

(パーセント)

北区	9.0	江南区	8.0	西区	20.0
東区	16.3	秋葉区	11.2	西蒲区	7.1
中央区	22.9	南区	5.3	不明	0.2

②調査結果

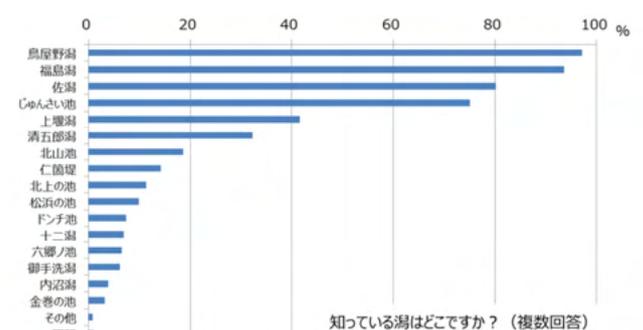
市民の多くが潟や水辺に親しみを感じ、訪ねた経験を持っている。しかしながら、その多くは公園や施設が整備された福島潟、鳥屋野潟、佐潟、じゅんさい池、上堰潟などで、小さな潟の存在はあまり知られていない。

また、ラムサール条約の言葉を知る人は多いが、その柱の一つであるワイズユース(賢明な利用)についてはあまり知られていない。

残された潟群を市民の宝として保全、活用しながら次世代に伝えてゆくためには、「ワイズユース」の考え方を広く市民に知ってもらう努力が一層必要であることが示された。

【潟や水辺と市民の意識やかかわりについて】

- ▶ 85パーセントが市内の水辺に親しみを感じている。
- ▶ 潟のイメージは、「景観が良い」、「動植物が豊か」、「安らぎや憩いの場」。
- ▶ 水質が悪いと思う人は若い年代ほど高い。
- ▶ 潟があることを知っている人は97パーセント、訪れたことがある人は96パーセント。
- ▶ 知っている潟、訪れたことがある潟は、多い順に鳥屋野潟、福島潟、佐潟。



【市の研究活動について】

- ▶ 市が潟環境研究所を立ち上げて調査・研究することを、市民の86パーセントが評価している。
- ▶ 今後知りたいことは、「潟の生物」や「潟の保全」の割合が他と比べて高い。また、潟の逸話・伝説などへの市民の関心もうかがえる。

※調査結果の詳細は巻末資料に掲載

（4）歴史・暮らし文化伝承資料としての記録映像制作

『潟』の記憶—潟と共に生きる人々の物語』の制作

潟に関する調査を進める中、潟での生業を経験した世代が高齢化し、語り部も失われつつあることがわかってきた。

こうした危機感から、潟周辺住民と潟とが共生してきた独自の潟文化の中から、特に暮らしについて焦点をあてた映像を記録保存するとともに、歴史資料として後世に伝えていくために、『潟』の記憶—潟と共に生きる人々の物語』と題する映像集として作成し公開した。

本編映像は、2015(平成27)年7月から2016(平成28)年2月にかけて、佐潟、上堰潟、鳥屋野潟、福島潟の4つの潟に関して撮影したもので構成した。

この映像は、人々の経験や記憶から、新潟市の「潟」が浮かび上がってくる、というようなものを目指し、映像全体の構成として、人物が経験してきた潟端の暮らしについて語るインタビュー映像を比較的長く収録した。

それに、佐潟では、盆のハスの花とり、冬の地引網漁、上堰潟では田舟の新造船進水、鳥屋野潟では投網漁・追い込み

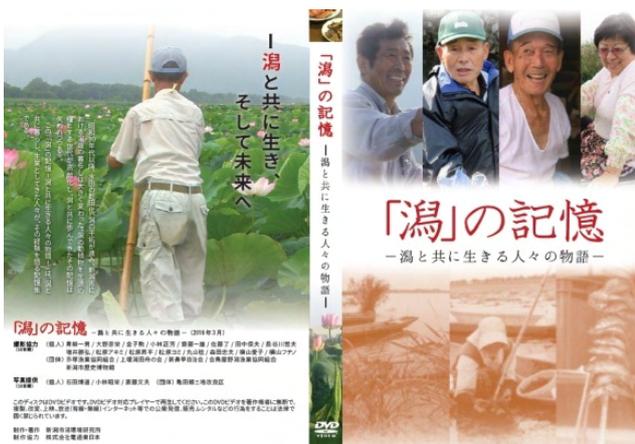
漁の実演、福島潟では秋のヒシもぎ、潟の食材調理の様子などを加えた。これらの撮影は、各潟の周辺住民の協力がなければ実現できなかったことである。

これまで、大穀倉地帯となった越後平野を語るとき、低湿地での稲作の苦労や度重なる水害に悩まされた「水との闘い」の歴史が強調されてきた。

しかし、一方で、この映像でとりあげた人々の語りからは、潟の恵みを享受する暮らし、「水との共生」の歴史があったことがうかがえる。

公開方法について

公式サイト「潟のデジタル博物館」で配信のほか、DVDとして視聴覚資料を取り扱う市立図書館や大学図書館等に配架した。また、イベントなどの機会を捉え放映するなど活用を図っている。



パッケージ



佐潟での撮影時の様子



上堰潟周辺住民へのインタビュー



鳥屋野潟での漁



福島潟の漁業関係者との対談

撮影協力(50音順)

(個人) 青柳一男/大野彦栄/金子勲/小林正芳/齋藤一雄/佐藤了/田中保夫/長谷川哲夫/増井勝弘/松原アキミ/
松原昇平/松原ヨミ/丸山稔/森田忠夫/横山愛子/横山フヂノ

(団体) 赤塚漁業協同組合/上堰潟田舟の会/新鼻甲自治会/鳥屋野潟漁業協同組合/新潟市歴史博物館

写真提供(50音順)

(個人) 石田博道/小林昭栄/齋藤文夫 (団体) 亀田郷土地改良区

ネットワーク構築及び連携強化

(1) 潟周辺地域の関係者や有識者との協力体制の構築

各潟周辺地域の関係者や有識者を外部相談員として迎え、市内の潟を一体的に捉えた調査体制づくりに取り組んでいる。

※外部相談員としての在任期間に関係なく掲載

氏名 (50音順)	所属 (※役職は外部相談員就任当時のもの)	氏名 (50音順)	所属 (※役職は外部相談員就任当時のもの)
五十嵐初司	じゅんさい池公園を守る会 事務局長	中島 榮一	潟東樋口記念美術館・潟東歴史民俗資料館 館長
大谷 一男	黒崎南ふれあい協議会 会長	中村 忠士	じゅんさい池公園を守る会
加藤 功	新潟映像制作ボランティア 副代表	松浦 和美	新潟市南商工振興会 理事
紙谷 智彦	新潟大学 大学院 自然科学研究科 教授	松原 将	新潟市土地基盤整備推進協議会 企画部会長
小山 芳寛	NPO 法人ネットワーク福島潟 代表	宮尾 浩史	宮尾農園 代表
齋藤 一雄	上堰潟公園を育てる会 代表	村山 和夫	松浜地区コミュニティ協議会 地元学部会 部長
佐藤 譲	六郷池組合 代表	森 行人	新潟市歴史博物館(みなとぴあ) 学芸員
佐藤 安男	水の駅「ビュー福島潟」事務局長	山口 浩二	新潟市南商工振興会 副会長
清野 誼	北山池公園の自然を愛する会 会長	山崎 敬雄	岡方地区コミュニティ委員会 会長
高橋 剛	内沼自治会 会長	涌井 晴之	佐潟と歩む赤塚の会 代表
高橋 善輝	新潟市土地基盤整備推進協議会 企画部会長	渡辺 重雄	北山池公園の自然を愛する会

(2) ネットワーク会議の開催

各潟周辺地域の関係者や有識者と、市役所関係課との連携強化を図るため、情報共有や意見交換が直接できる場として、定期的にネットワーク会議(通称:潟環境研究所定例会議)を開催している。

①26年度

※講師の肩書き・役職等掲載情報は、開催当時のもの

回	月/日	主な講演内容	講師名・所属(敬称略)
1	4/16	潟環境研究所の目的と研究調査の進め方	大熊 孝(所長)
		川とは?潟とは?人の“からだ”と“こころ”をつくるもの	
2	5/21	環境政策課が行っている潟に関する取り組みについて ～佐潟周辺自然環境保全計画の改定など～	工藤勇一(環境政策課)
		田んぼダムは水質改善にも貢献するのか?	吉川夏樹(客員研究員/新潟大学農学部准教授)
3	6/11	水と土の文化推進課が行う潟に関する取り組みについて	中島正裕(水と土の文化推進課)
		新潟県内の湖沼における水生植物相の変遷とこれから	志賀 隆(客員研究員/新潟大学教育学部准教授)
4	7/16	新潟平野の湖沼群の魚類相・・・過去と現在	井上信夫(協力研究員/生物多様性保全ネットワーク新潟)
夏期 特別	8/20	越後平野の分水路、用水路、干拓地などの現地視察	大熊 孝(所長)
5	9/17	芦沼から田園都市へ	藤井大三郎(田園まちづくりアドバイザー)
		潟の歴史について～佐潟を中心に～	太田和宏(協力研究員/赤塚中学校地域教育コーディネーター)
6	10/15	低湿地の民俗について	森 行人(外部相談員/新潟市歴史博物館学芸員)
7	11/19	西の湖水郷めぐりから見た水を巡る生活	林 絢子(事務局研究員)
		福井県勝山市におけるエコミュージアムをもとにした まちづくりについて	丸山紗知(事務局研究員)
		潟のほitoriから	佐藤安男(外部相談員/水の駅「ビュー福島潟」事務局長)
8	12/17	銚潟周辺の低湿地における暮らし (潟東歴史民俗資料館視察も実施)	中島榮一(外部相談員/潟東歴史民俗資料館館長)
9	1/21	各区役所での潟に関するかかわりや業務について	西脇 哲(北区地域課)、伊藤徹太郎(中央区地域課)、 渡辺 希(西区地域課)、長倉 尚(西蒲区地域課)
		上堰潟のあゆみ	齋藤一雄(外部相談員/上堰潟公園を育てる会代表)
10	3/26	日本人の自然観を振り返り、“魂が還れる自然”の復元 を考える	大熊 孝(所長)

②27年度

回	月/日	主な講演内容	講師名・所属（敬称略）
春季特別	4/30	みなとびあ（新潟市歴史博物館）の企画展「田んぼで魚とり～低湿地の漁と漁具～」見学	森 行人（外部相談員／新潟市歴史博物館学芸員）
1	5/28	鳥屋野潟湖岸堤整備について	横田浩司（まちづくり推進課）
		「カナル彩」を中心とした鳥屋野潟及びその周辺の盛り上げ	山口浩二（外部相談員／新潟市南商工振興会副会長）
		鳥屋野潟周辺のブランド化を目指す～ポータルサイト紹介～	松浦柗太郎（新潟市南商工振興会会員）
		「とやの潟環境舟運」を中心とした潟の活用の仕方及び今後の展開	相楽 治（新潟市南商工振興会事務局長）
		魅力を増していく鳥屋野潟への期待と夢	村尾建治（新潟市南商工振興会会長）
2	7/23	はじめまして、内沼潟ですよ。	高橋 剛（内沼自治会会長）
		十二潟について	山崎敬雄（岡方地区コミュニティ委員会会長）
3	9/24	上堰潟生き物調査結果について	井上信夫（協力研究員／生物多様性保全ネットワーク新潟）
		木場潟公園（石川県小松市）について	大熊 孝(所長)
		ドンチ池について	中原藤雄（赤塚郷土研究会会長）
		先人の残してくれた宝 北山池	清野 誼（北山池公園の自然を愛する会会長）
4	11/19	じゅんさい池の自然 現状と課題について	井上信夫（協力研究員／生物多様性保全ネットワーク新潟）
		都市における公園の在り方 都市型公園の小金公園と自然型公園のじゅんさい池公園のかかわり方（じゅんさい池現地視察も実施）	五十嵐初司（じゅんさい池公園を守る会事務局長） 中村忠士（じゅんさい池公園を守る会）
		仙北平野湖沼群について	大熊 孝(所長)
5	1/28	松浜の池～砂山に立てば、阿賀野川河口と日本海、さらに飯豊連峰を一望できるオアシス～	加藤 功(外部相談員／新潟映像ボランティア副代表)
		松浜の池と松浜地区コミュニティ協議会地元学部の活動について	村山和夫(松浜地区コミュニティ協議会地元学部部长)
		郷土の歴史から見えてくるもの～川切れの痕跡を残す水戸際池～	大谷一男(黒埼南ふれあい協議会会長)
6	3/24	北上の池、六郷ノ池について	丸山紗知（事務局研究員）
		魂の還れる自然とこれからの新潟の潟	大熊 孝(所長)

③28年度

回	月/日	主な講演内容	講師名・所属（敬称略）
1	4/28	市民ハクチョウ調査結果について	小林博隆（環境政策課）
		六郷ノ池について	佐藤 譲(六郷池組合代表)、山崎孝雄(六郷自治会会長) 細貝正人(六郷自治会副会長)
2	5/26	十二潟・内沼潟・松浜の池の現地視察（周辺施設等も含む）	高橋 剛（外部相談員／内沼自治会会長）、長谷川文夫（内沼潟共有者会会長）、山崎敬雄（外部相談員／岡方地区コミュニティ委員会会長）、木村廣衛(松浜地区コミュニティ協議会地元学部部长)
3	7/28	ラムサール条約に関する基礎知識などについて	小林博隆（環境政策課）、西脇 哲（北区地域課）
4	9/29	内沼潟の生物調査結果について	高橋 剛（外部相談員／内沼自治会会長）
		山川草木悉有仏性～日本人の自然観を振り返る～	大熊 孝(所長)
5	11/24	新潟の妖怪～水の妖怪編～	高橋郁丸（協力研究員／新潟県民俗学会理事）
		構造物の見方＆考え方～構造物は思想の表現である～	大熊 孝(所長)
6	1/26	3年間の調査・研究活動の総括として	井上信夫（協力研究員／生物多様性保全ネットワーク新潟） 太田和宏（協力研究員／赤塚中学校地域教育コーディネーター）
7	3/23	3年間の調査・研究活動の総括として	志賀 隆（客員研究員／新潟大学教育学部准教授）

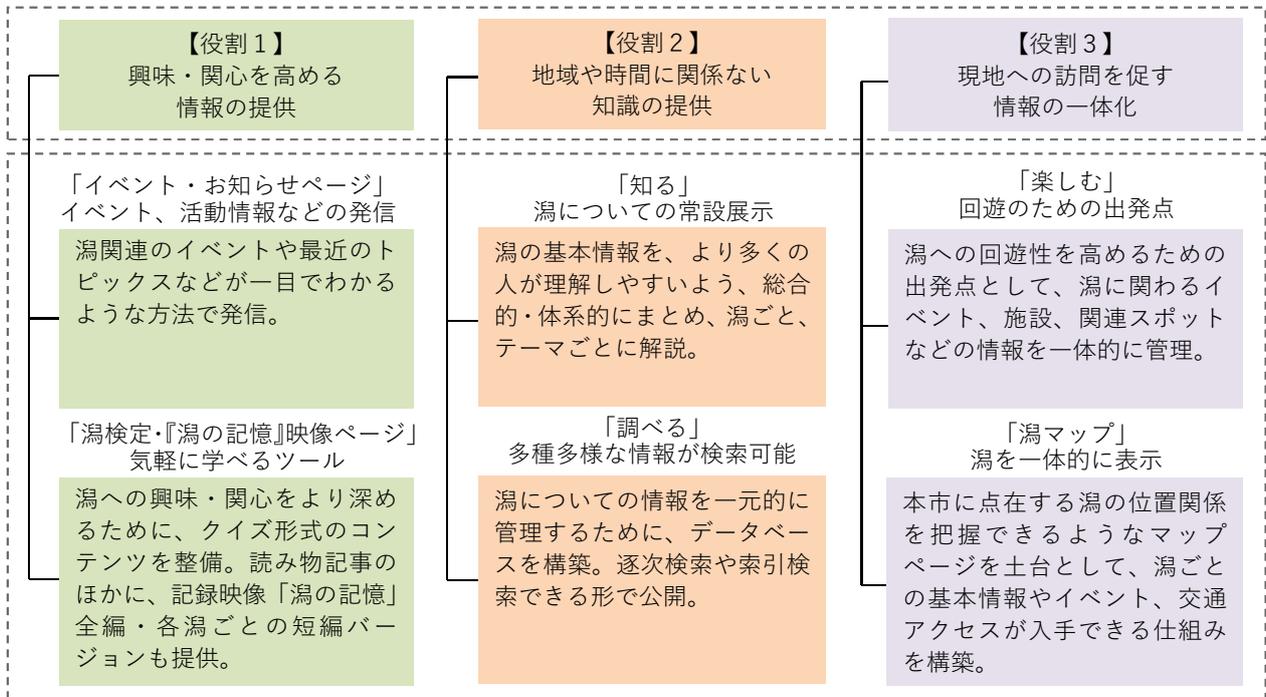
※講演のほか、潟と人とのあり方に関する提言検討を第3回～第6回の計4回に渡り実施

調査・研究成果などの情報発信

(1) 公式サイト「潟のデジタル博物館」による発信

当研究所の調査・研究成果や、市内を中心とした越後平野の潟に関する情報の発信手法の1つとして、平成27年3月に、公式サイト「潟のデジタル博物館」を開設した。

■「潟のデジタル博物館」の3つの役割とコンテンツ構成



■ページ閲覧数

	27年度		28年度			27年度		28年度	
	閲覧数	割合	閲覧数	割合		閲覧数	割合	閲覧数	割合
全体	88,874	(100.00%)	99,961	(100.00%)	潟マップ	1,648	(1.85%)	3,773	(3.77%)
知る	20,032	(22.54%)	28,641	(28.65%)	イベント・お知らせ	9,451	(10.63%)	8,188	(8.19%)
調べる	32,091	(36.11%)	30,639	(30.65%)	潟検定/潟の記憶	4,657	(5.24%)	12,544	(12.55%)
楽しむ	1,473	(1.66%)	1,435	(1.44%)	その他ページ	19,522	(21.97%)	14,741	(14.75%)

※27年4月1日～28年3月31日(365日) / 28年4月1日～29年2月28日(333日) 28年度は編集の都合上、集計可能日数にて掲載



トップページとコンテンツイメージ



スマートフォンでのレイアウトに最適化

多言語化や掲載情報がフェイスブックにも自動的に反映されるような仕組み、実際の潟でのさまざまな用途に対応できるように、スマートフォンやタブレットなどでの閲覧に合わせたレイアウトの最適化など、機能の充実に努めた。

(2) シンポジウムなどでの発信

①水と土の芸術祭 2015 第2回プレシンポジウム

自然との共生 ～命はぐくむ水と土との
グラデーションをみつめて～

【日時】 2015（平成27）年2月11日（水・祝）
14:00～17:00

【会場】 新潟市民プラザ

【参加者数】 約400名

【主催】 新潟市（潟環境研究所・水と土の文化推進課）／水と土の芸術祭 2015 実行委員会

≪第2部≫

「里潟」～潟と人とのいい関係

—新潟市潟環境研究所報告—

【コーディネーター】

大熊 孝（潟環境研究所長／新潟大学名誉教授）

【パネリスト】

吉川夏樹（潟環境研究所客員研究員／
新潟大学農学部准教授）

志賀 隆（潟環境研究所客員研究員／
新潟大学教育学部准教授）

篠田 昭（新潟市長）

この「水と土の芸術祭2015第2回プレシンポジウム 自然との共生～命はぐくむ水と土とのグラデーションをみつめて～」は、歌や詩の朗読、パネルディスカッションなど多彩な観点から、潟に親しみ、潟を再発見するシンポジウムとして開催した。

全3部構成のうち、第2部で当研究所の研究報告をパネルディスカッション形式で行った。

まず、大熊所長が、阿賀野市の「瓢湖」と「福島潟」「鳥屋野潟」「佐潟」「上堰潟」について水面積や水面標高などの比較を紹介した。身近にありながら意外と知られていない潟の情報を整理し提示することの必要性や、人とのかかわり、「里潟」という言葉を大切にしながら調査・研究を進めていると説明した。



大熊所長が各潟の特徴を説明

次に、吉川研究員が、「田んぼダムによる潟の水質改善」として、鳥屋野潟で調査した土砂流出抑制に関する研究報告を行い、志賀研究員が、「失われた水草たちを水辺に呼び戻すことは可能か」として、福島潟の土から調査した水辺の植物の復活の試みにする研究報告を行った。



第3部では詩集『鎧潟』を著書である国見修二さんが朗読



最後は参加者による「水鏡」の大合唱

②平成27年度「潟」シンポジウム

～自然からのおくりもの～

【日時】2016（平成28）年2月20日（土）
14:00～17:00

【会場】新潟市民プラザ

【参加者数】約430名

【主催】新潟市（潟環境研究所・水と土の文化推進課）

≪第2部≫

「潟の記憶」を求めて～潟の恵みと食文化と～

—新潟市潟環境研究所 研究成果報告—

【コーディネーター】

大熊 孝（潟環境研究所所長・新潟大学名誉教授）

隅 杏奈（潟環境研究所 研究員）

【パネリスト】

増井勝弘（鳥屋野潟漁業協同組合 組合長）

横山愛子（北区新鼻甲自治会 副会長）

加藤 功（潟環境研究所外部相談員／
新潟映像制作ボランティア 副代表）

井上信夫（潟環境研究所協力研究員／
生物多様性保全ネットワーク新潟）

太田和宏（潟環境研究所協力研究員／
赤塚中学校地域教育コーディネーター）

【コメンテーター】

篠田 昭（新潟市長）

この「平成27年度「潟」シンポジウム ～自然からのおくりもの～」は、潟の魅力を再発見することをテーマに基調講演とパネルディスカッションによる当研究所の研究成果報告の全2部構成で開催した。

パネリストとして、三世代にわたって鳥屋野潟の漁に携わる増井勝弘氏、福島潟の潟端で生まれ育ち、潟の食材を使った料理で地元をPRする横山愛子氏、水と土の芸術祭2015 市民プロジェクト作品「新潟市の潟を鳥の眼で訪ねる旅」を制作した加藤 功外部相談員、魚類の専門家である井上信夫協力研究員、佐潟で保全・イベント活動を続けている太田和宏協力研究員が登壇した。



シンポジウムの様子

パネルディスカッションでは、加藤 功外部相談員から「新潟市の潟を鳥の眼で訪ねる旅」を見ながらの各潟の紹介、井上研究員からは福島潟、鳥屋野潟、佐潟、上堰潟を中心とした魚類相の解説が行われた。

その後、佐潟での蓮花の収穫、鳥屋野潟での漁、福島潟でのヒシ取りや潟の食材での調理の様子などの映像とともに、各パネリストとの話し合いを展開した。

最後に篠田市長が「お集まりいただいた皆さまは、潟は大変魅力的だと感じていただけたと思います。潟を大切に作る運動を地域で広め、新潟は潟を楽しんでいるということ、国内外に発信していきたい」とコメントして締めくくった。

なお、今回はパネリストの協力を得て、実際に使用している漁具、魚を入れた水槽、自作の屏風など、会場ロビーでの展示にも力を入れた。



コメントする篠田市長

③雁と白鳥シンポジウム「鳥のくらしと水辺の環境」

【日時】2016（平成28）年2月28日（日）
13:30～16:30

【会場】水の駅「ビュー福島潟」6階展望ホール

【参加者数】70名

【主催】水の駅「ビュー福島潟」

【共催】新潟市（潟環境研究所）、新潟県水鳥湖沼ネットワーク、日本野鳥の会新潟県

≪プログラム④≫「鳥のいる潟 潟にいる鳥」談義

【コーディネーター】

丸山紗知（潟環境研究所 研究員）

【パネリスト】

大熊 孝（水の駅「ビュー福島潟」名誉館長／
新潟大学名誉教授）

千葉 晃（新潟県野鳥愛護会副会長／
日本歯科大学名誉教授）

岡田成弘（日本野鳥の会新潟県副会長／
新潟県水鳥湖沼ネットワーク副代表）

4部構成のプログラムの始めに、千葉晃氏が「鳥のくらしと水辺の環境」と題し、基調講演を行った。福島潟、瓢湖、鳥屋野潟、佐潟の4潟の自然環境と、鳥相、ハクチョウを中心とした大型水禽類の越冬生活、環境の変化と野鳥のくらしについて話した。

引き続き、新潟県水鳥湖沼ネットワークが、瓢湖、福島潟、阿賀野川、鳥屋野潟、佐潟、計5か所のハクチョウ、ガン類の今季の生息数調査の結果を報告した。

最後のプログラム「鳥のいる潟 潟にいる鳥」談義には、当研究所から、大熊所長と丸山研究員が参加。基調講演や調査報告の内容を踏まえたこの談義では、あらかじめ配布した質問用紙により、参加者からの多くの質問にパネリストらが答えることができ、参加者との間に一体感が生まれた。



談義の様子

④潟の記憶上映会

【日時】2016（平成28）年5月30日（月）
15:00～16:30

【会場】新潟市生涯学習センター4階映像ホール

【参加者数】約70名

【内容】

記録映像『「潟」の記憶

—潟と共に生きる人々の物語—』上映

映像『新潟市の潟を鳥の眼で訪ねる旅』上映

『「潟」の記憶—潟と共に生きる人々の物語—』の完成を記念し、撮影協力者と鑑賞するための上映会を開催した。また、この上映会では、貴重な水辺空間である潟を鳥の眼になって紹介する「新潟市の潟を鳥の眼で訪ねる旅—水と土の芸術祭2015 市民プロジェクト作品—」をあわせて上映した。



上映の様子

鑑賞後には、この記録映像の出演者である、齋藤一雄氏（上堰潟田舟の会）、増井勝弘氏（鳥屋野潟漁業協同組合）、横山愛子氏（新鼻甲自治会）の3名が、潟にまつわる話や撮影秘話を語り、会場からの質疑に応じるなど、会場を大いに沸かせた。



出演者との座談会

⑤佐潟20ラムサールフェス まちなか編

—命を育む里潟を次世代に—
シンポジウム 里潟の魅力を語る

【日時】2016（平成28）年11月13日（日）
13:30～16:30

【会場】新潟市市民芸術文化会館（りゅーとぴあ）
能楽堂

【参加者数】350名

【主催】新潟市（潟環境研究所・文化創造推進課・
環境政策課）

≪第4部≫ パネルディスカッション

【コーディネーター】

大熊 孝（潟環境研究所所長・新潟大学名誉教授）

【パネリスト】

椎名 誠（作家、元・水の駅「ビュー福島潟」名誉館長）

嶋田哲郎（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
上席主任研究員）

辻田香織（環境省自然環境局野生生物課
湿地保全専門官）

涌井晴之（佐潟ラムサール条約登録
20周年記念事業実行委員長）

若尾明弘（新潟市北区自治協議会地域・環境部会長）

篠田 昭（新潟市長）



佐潟を守り育ててきた人々との関わりを見つめ直し、里潟を次世代に継承していくことをテーマにしたシンポジウム「佐潟20ラムサールフェス」を開催した。

この企画は佐潟周辺で行う「地元編」と「まちなか編」で構成されており、まちなか編でパネルディスカッションを行った。このほかのプログラムとして、16潟の映像放映、基調講演、仙北平野の事例紹介なども行われた。

今回は、佐潟のラムサール登録20年を振り返るとともに、北区自治協議会からラムサール条約湿地登録の要望書が提出されている福島潟を取り巻く状況や、大熊所長提案の「ラムサール条約都市・新潟」という発想の説明などを基に展開した。

会場の参加者からは「学校教育とのリンクは日本のラムサール条約登録湿地でもナンバー1。都市にこれだけの水辺があるということ自体、大変素晴らしい。魚がとれるとか、おいしいお米ができるという直接的なことだけではなく、水辺があって、歩くと気持ちが良い、きれいなものを見て安らぎを得られる大きな都市は日本ではほかにない。そういう意味では、ラムサール条約が目指していることを体現している都市として、ぜひ歩みを進めてほしい」との意見が出た。



シンポジウムの様子



大熊所長、篠田市長をはじめとする出演者たち

(3) 他団体主催のシンポジウムへの参加

○ラムサールシンポジウム 2016 in 中海・宍道湖

【開催時期】 2016(平成 28) 年
8月 27日(土)～29日(月)

【開催場所】 鳥取県米子市・全日空ホテル

【主催】 日本国際湿地保全連合／ラムサールセンター／日本湿地学会／環境省／鳥取県／島根県／中海・宍道湖・大山圏域市長会／中海水鳥国際交流基金財団／ホシザキグリーン財団

ポスター発表によるプレゼンテーション

環境政策課と合同で「ラムサールシンポジウム 2016 in 中海・宍道湖」へ参加。プログラムの1つとして実施されたポスター発表にて、新潟市の「潟」に関する取り組みをプレゼンテーションした。

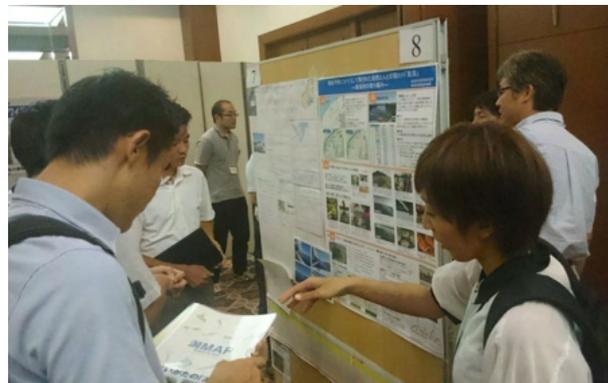
内容として、潟環境研究所は市内の16潟を対象に、「里潟」という観点から調査・研究をしていること、記録映像「潟」の記憶を紹介した。環境政策課は、ラムサール条約登録 20 周年を迎えた佐潟での取り組みを発表。参加者からは、新潟市内で活動する環境NPOがどれくらいあるのか、市内で消滅しそうな潟はあるのかなどの質問を受けた。また、市内の潟を紹介したパンフレットの潟マップが好評だった。

先進的と言っても過言ではない新潟市

シンポジウムへの参加を通して、新潟市の佐潟における地域住民、市民団体、行政が連携して取り組む湿地保全とワイズユースの事例は、全国のラムサール条約登録湿地でも先進的なものであると改めて感じられた。佐潟だけでなく、新潟市の潟を一体的に調査・研究する潟環境研究所が発足して、3年目となり、今後、国内外の湿地の保全の推進に、新潟市が果たす役割も大きいのではないかと考える。



発表に使用したポスター



ポスター発表の様子

※このラムサールシンポジウムは、第1回(1996年)、第2回(2001年)が新潟市で開催されており、実行委員長は当時新潟大学教授であった大熊孝が務めた。湿地の保全や賢明な利用に関する全国の取り組みや課題が発表され、国内の活動推進に大きく寄与した。今回はこの第1回開催から20年が経過し、湿地の保全と賢明な利用のための行動をさらに進めるためには、登録湿地の関係自治体、市民、NGO、研究者等による日本におけるラムサール条約湿地をはじめとする湿地に関する取組み、現状、課題などの総合的なレビューを行い、湿地を軸としたネットワークを築き、協働を強化することが必要との観点で開催されたものである。

《シンポジウムプログラム》

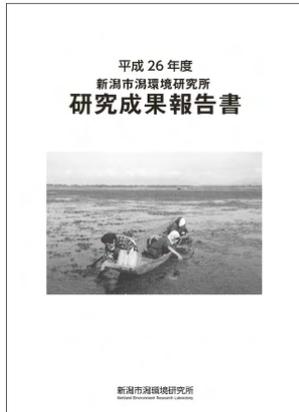
- 【8月27日】宍道湖エクスカースョン
- 【8月28日】特別セッション(中海・宍道湖セッション)／(午後)セッション1：日本の湿地をとりまく状況はどう変わったか／(夜)ポスター発表
- 【8月29日】(早朝)中海エクスカースョン／(午前)セッション2：湿地を地域にどう役立てるか／(午後)セッション3：湿地の管理に携わる人々の活動を強化するには



(4) 刊行物の発行

①研究成果報告書

発行部数：各年度 130 部



<主な内容>

- 日本人の自然観を振り返り、“魂が還れる自然”の復元を考える～新潟市潟環境研究所の基本理念と目標に変えて～（大熊 孝 潟環境研究所 所長）
- 田んぼダムによる潟の水質改善に関する研究（吉川夏樹 潟環境研究所 客員研究員）
- 掘削地の植物相調査と土壌撒きだし試験による福島潟の埋土種子集団の解明（志賀 隆 潟環境研究所 客員研究員）
- 越後平野の湖沼の魚類相（井上信夫 潟環境研究所 協力研究員）
- 新潟市西区に関する潟と人の共存（里潟）について～潟の歴史的関わりについて（佐潟を中心として）～（太田和宏 潟環境研究所 協力研究員）
- 【特別寄稿】『潟』の新潟（卯田 強/元新潟大学理学部講師）



<主な内容>

- 田んぼダムによる潟への土砂堆積抑制に関する研究（吉川夏樹 潟環境研究所 客員研究員）
- 新潟市西蒲区鍮潟干拓地の水生植物相（丸山紗知 潟環境研究所 事務局研究員・志賀 隆 潟環境研究所 客員研究員）
- 上堰潟の魚類相調査報告（井上信夫 潟環境研究所 協力研究員）
- 「山当て」による潟とその周辺集落の“鎮め”について（太田和宏 潟環境研究所 協力研究員）
- 「『潟』の記憶一潟と共に生きる人々の物語一」制作を終えて（隅 杏奈 潟環境研究所 事務局研究員）
- 【特別寄稿】
- 新潟平野の潟湖と野生鳥類の生活（千葉 晃/日本歯科大学名誉教授）
- 潟の恵み・食について（丸山久子/食文化・郷土食研究家）

②ニューズレター

年 2 回発行（研究成果やその時々々の潟にまつわる情報など掲載）



創刊号(26年7月発行/3000部)



第2号(27年2月発行/6000部)



第3号(27年7月発行/5000部)

<主な掲載内容>

- 創刊号：組織概要／田んぼダムは水質改善にも貢献するのか？／湖沼における水生植物相の変遷とこれから／潟のエッセイ「佐潟のウナギ」ほか
- 第2号：潟のほりから／新潟市の四潟比較～“里潟”の復活をめざして～／田んぼダムによる潟の水質改善に関する研究／失われた水草たちを水辺に呼び戻すことは可能か？／姿を消した春告げ魚／潟端の鴨猟・潟食クッキング／潟のエッセイ「潟を生かす、潟を守る」ほか
- 第3号：公式サイト「潟のデジタル博物館」開設／潟食クッキング／潟のエッセイ「田んぼで魚とり」ほか



第4号(28年2月発行/5000部)



第5号(28年7月発行/5000部)



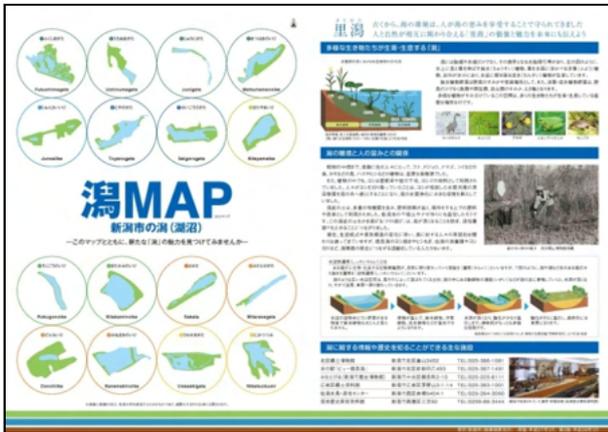
第6号(28年2月発行/5000部)

<主な掲載内容>

- 第4号：佐潟ラムサル登録20周年に寄せて／越後平野4潟の魚類相／「潟の記憶」を求めて あるく・きく・とる／鳥のくらしと水辺の環境／宮城県仙北平野のラムサールトライアングルを視察して／潟食クッキング／潟のエッセイ「ガタモノガタリ」ほか
- 第5号：命を守る・佐潟と共に／消えた鍔潟／鍔潟干拓地に眠る水生植物／福島潟の現状と課題／水辺の怪異／郁丸が探る！にいがた「潟」伝説・アンナ隊長「潟を食べる!!」／潟のエッセイ「上堰潟は地域の宝物」ほか
- 第6号：福島潟が土木学会デザイン賞を受賞！／里潟の未来を見つめ、ひろげる／山川草木悉有仏性／佐潟と赤塚砂丘を一体化したレクリエーションゾーン構想／潟研とびっくす・ワイズユース (wise use) ってなに？／郁丸が探る！にいがた「潟」伝説・アンナ隊長「潟を食べる!!」／潟のエッセイ「清五郎開拓八人衆」を未来へつなぐ

③パンフレット

潟 MAP／発行部数：各年度 30,000部（市内の潟の基本情報を掲載）



「潟」の記憶／発行部数：4,000部（記録映像「潟」の記憶を紹介）



総合窓口としての支援・協力

(1) 小・中学校の学習機会への協力

小・中学校の学習機会への協力として、小・中学校の「総合学習に関する時間」や中学校の「職場体験学習」での生徒の受け入れを行った。

「総合学習に関する時間」では、当研究所に訪れた生徒に、所長及び事務局研究員が講義(授業)を行うだけでなく、実際の潟に出向き、現地でワークショップを実施した。

また、潟 MAP を、市内の小学5年生と中学2年生を対象に毎年配付している。



赤塚中学校の生徒が、職場体験学習としてネットワーク会議の運営に参加



新潟大学附属新潟小学校とのワークショップ



高志中等教育学校の生徒への講義

年度	学校名	学年	人数	対応
27	岩室中学校	2 学年	5 名	「総合学習に関する時間」 研究所内で所長及び事務局研究員による授業
	高志中等教育学校	1 学年	9 名	
	新潟大学附属新潟小学校	3 学年	1 クラス	「総合学習に関する時間」 鳥屋野潟にてワークショップ実施
28	高志中等教育学校	1 学年	4 名	「総合学習に関する時間」 研究所内で所長及び事務局研究員による授業
	赤塚中学校	2 学年	2 名	「職場体験学習」での生徒受け入れ

(2) 関係機関・各種団体などが実施する事業への参加・協力

① 関係機関・各種団体が実施する事業への主な参加・協力実績

年度	イベント・事業名	主催等	内容
26	じゅんさい池公園の生きもの観察と外来生物対策	NPO 法人五泉トゲソの会ほか	当日運営に参加
	とやの物語 2014	とやの物語実行委員会	所長による講演（環境講演会）
27	とやの潟環境遊覧 2015	とやの潟環境舟運実行委員会	関連情報発信のほか当日運営に参加
	潟の生き物保護大作戦 in 新潟	雪国自然学校ほか	当日運営に参加
	とやの物語 2015	とやの物語実行委員会	所長による講演（環境講演会）
	みんなで考えよう じゅんさい池公園の現在・未来	東山の下地区 コミュニティ協議会ほか	所長による基調講演 パネルディスカッション参加 （所長がコーディネーター、 井上信夫協力研究員がパネリストと して参加）
	じゅんさい池関係者向けワークショップ		企画立案及び当日運営に参加
	市民ハクチョウ・ホワイテ・フェスタ	市民ハクチョウ・ホワイテ・フェスタ実行委員会	ステージ発表、パネル展示
	新潟大学法学部「特殊講義（新潟市の行政）」 戦略産業雇用創造プロジェクト 「小型モビリティ関連産業創出事業」	新潟大学と新潟市の包括連携協定による 新潟県	大学生への講義 実証実験への協力
28	2016 とやの潟環境舟運	とやの潟環境舟運 2016 実行委員会	関連情報発信のほか当日運営に参加
	新潟大学法学部「特殊講義（新潟市の行政）」	新潟大学と新潟市の包括連携協定による	大学生への講義
	佐潟 20 ラムサールフェス「地元編」	佐潟ラムサール条約登録 20周年記念事業実行委員会	潟の記憶上映、パネル展示のほか 当日運営に参加

② 新潟市役所関係課が実施する事業への主な参加・協力実績

年度	イベント・事業名	主催等	内容
26	水の潟ログ	水と土の文化推進課	運営協力
	動く市政教室「新潟の原点・潟めぐり 2014 ～潟の魅力発見ツアー」	広報相談課・環境政策課	解説員として参加
27	動く市政教室「新緑の潟めぐり」	広聴相談課・環境政策課	解説員として参加
	動く市政教室「芸術祭から知る 潟の今昔」	広聴相談課・水と土の文化推進課	解説員として参加
	水と土の芸術祭 2015	水と土の芸術祭 2015 実行委員会事務局 （水と土の文化推進課）	パネル展示、ホームページでの 情報発信
	新潟市中央図書館企画展「新潟市の里潟」	環境政策課	パネル展示
28	動く市政教室「陽春の潟めぐり」	広聴相談課・環境政策課	解説員として参加
	動く市政教室「里潟の水と自然を学ぶツアー」	広聴相談課・環境政策課	解説員として参加
	ふれあいスクール事業 第1回地域の自然 を知ろう！～福島潟やビオトープについて～	豊栄地区公民館	事務局研究員が講師として参加
	潟めぐりスタンプラリー	文化創造推進課	実施協力
	新潟市中央図書館企画展 「ラムサール条約登録湿地 佐潟」	環境政策課	パネル展示
	佐潟 20 ラムサールフェス「まちなか編」	環境政策課・文化創造推進課	シンポジウムの運営
	新潟市の鳥「ハクチョウ」と潟エコツアー	環境政策課・文化創造推進課	解説員として参加



じゅんさい池公園の現在・未来での大熊所長の基調講演



市民ハクチョウ・ホワイテ・フェスタへの参加



ほんぽーとでのパネル展示



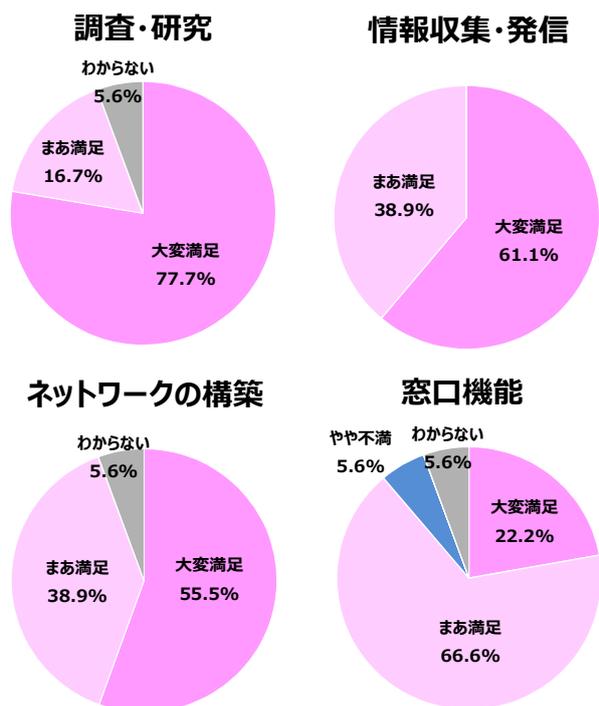
新潟市の鳥「ハクチョウ」と潟エコツアーでの解説

第3章 活動評価

(1) 関係者による評価

当研究所の4つの役割に基づく活動を、客観的に評価し、得られた結果を、これからの活動に生かすことを目的として、ネットワーク会議参加者（外部相談員、客員研究員、協力研究員）による評価を実施した。

1) 調査結果



2) それぞれの活動についての主な意見

①調査・研究

- ▶ 地域に入って撮影した記録映像は、各湖沼での地域の人々の生活を知ることができる貴重な資料となる。市民へのアピール効果が高まった。
- ▶ 中立的、総合的視点が常に意識されている。
- ▶ 専門家と連携した調査・研究や伝承の記録などは、民間では取り組みが難しいと思われるが、専門的な知見が生きた内容であると感じる。
- ▶ ラムサール条約に関することをはじめ、いろいろなことを知る事ができ、非常に参考になる。
- ▶ 潟の自然環境、歴史やくらし文化に関する調査・研究の成果をもとに、自然環境と人・社会との関わり方についての理念の構築、それによる政策や事業、活動などへの提言を期待。
- ▶ 蒲原平野を俯瞰してみると、消えた潟に興味を寄せる人は意外と多くいるように感じる。残された潟を維持する意味で、いったん失った潟の記録も一方においてしっかりと整理しておく必要がある。

- ▶ ラムサール条約の事例調査について、推進するのであれば、市民が前向きに登録をとらえられるような事例を紹介する必要がある。
- ▶ 専門家の研究に対して、会合で意見が聞けることが評価できる。
- ▶ 文化伝承資料として記録映像を作成したこと。もっとアピールしてよいと思う。

②ネットワークの構築

- ▶ 多様な団体や庁内関係部署間のネットワーク構築による、多種多様な情報共有ができる。
- ▶ 各潟関係者との情報交換共有ができた。それが相互理解と一体感の醸成につながっている。
- ▶ 多様な団体・部署間のネットワークを活かし、利活用の中核となる潟をめぐる価値の共通認識をつくるとともに、それを基軸として潟の利活用の複層的な効果を見定め、関係部署や各種団体が政策や活動に反映していける場となることを期待。
- ▶ 他県のラムサールサイト、湿地関係者との連携、情報発信し潟環境研究所をアピールするべき。
- ▶ 将来、潟からの生産品を新潟の特産物として販売するだけでなく、潟の水辺資本を観光資源としていくため、市の商業・観光部門などをメンバーに加える必要がある。
- ▶ 各潟の関係者が集い、全市的視点から地元の潟や文化を考える機会ができたことは意義深い。
- ▶ 研究員の待遇が任期付きであったり、所属する新潟市職員の異動が頻繁に起こるため、構築した外部関係者との関係が一過性となる可能性が高く、心配である。

③情報収集・発信

- ▶ 研究所のシンポジウム開催を評価。市民に取り組みを広報できた。
- ▶ 潟 MAP・デジタル博物館は、これまで埋もれていた情報の発信に大きな力になっている。忘れ去られていたり気づかれなかった地域の財産の重要性を改めて評価する契機になっている。
- ▶ 継続的かつ細やかなデジタル博物館の管理運営により、潟をめぐる多種多様な情報へのアクセスサポートを期待。
- ▶ 研究成果報告書などは区役所、市内の図書館、佐潟水鳥・湿地センター、ビュー福島潟など主要機関で閲覧可能としてほしい。
- ▶ デザイン的な部分で発信力に課題を感じる。既存の関心層への外側を取り込んでいくには、マーケティングの視点も必要。
- ▶ 新潟市環境フェアへの出展を検討してはどうか。
- ▶ ツイッターで定期的に情報を配信してもよいと思う。潟環境研究所を知らない人が多い。

④ 窓口機能

- ▶ 各団体・施設で実施している小・中学校向け学習情報・プログラムの事例収集を期待。
- ▶ 現地でのワークショップ、出前授業を充実すべき。次世代の担い手の育成を強化してほしい。
- ▶ ユーザーにとっての窓口サポートメニューなどがあるとさらに心強い。
- ▶ 次世代を担う子どもたちへの関心を高めるためにも、専従スタッフ（研究所事務局員）を正規職員とし、スタッフの拡充を図るべき。
- ▶ 多くの潟研関係者が地域活動や総合学習に関わっている。潟環境研究所として、より積極的に講師派遣を進める体制としてはどうか。
- ▶ 市内の学校に利用してもらえるような資料が充実すると良い。

⑤ 潟環境研究所の活動との関係について

質問1 自身の意識・行動・つながりなどの変化

- ▶ 定例会議等での発表、意見で、専門的知見や含蓄の深い経験に触れ、自分の仕事の参考になった。
- ▶ あらためて市内の各潟で活動をしている団体、関係者を知ることができた。刺激になった。
- ▶ 潟にかかわる仲間が増えて喜ばしい思い。福島潟近隣の潟との連携していく機運を得た。成り立ちのほか潟舟など文化の共通項と相違点の関心を深めることができた。
- ▶ 水郷の地くろさきの観光史跡めぐりのガイドマップに、金巻の池(水戸際池)が川切れの痕跡を今に残している唯一ものと紹介させてもらった。
- ▶ 潟環境研究所の定例会議への参加依頼を受けて、初めて研究所の存在を知った。各潟の存在や先進的な取り組みを聞くことで、環境維持や利用など他の潟の関係者を見習って、今後に向けて積極的に取り組まねばと感じている。
- ▶ 潟は周辺も含めて魅力いっぱい。それをどう伝えるか、地域とのつながりに将来があると思う。娯楽性（楽しさの追及）と魅力は同じではないように思う。
- ▶ 他の地域の取り組みが刺激になった（自分の行動が変わった）。
- ▶ 散歩時に潟へ行くなど日常のなかで潟をとらえるようになった。
- ▶ 潟の脇で仕事をし、周辺を再編集し、発信するところまで変化しています。
- ▶ 自分たちの活動を、これからどうするか、考えさせられる事が多くなった点。
- ▶ 現存する潟の調査だけでなく、今はもう無くなった潟の調査の必要性を感じた。
- ▶ 潟は研究の対象でしかなかったが、そこに根付いてきた文化や多面的機能に強く関心をもつようになった。もっと一般の方にも潟を知ってもらいたいと思うようになった。

- ▶ 実際に潟を回る回数が増えた。魅力もますますわかってきて、家族や知人を連れていき、潟ファンを増やしている。
- ▶ 学校への出前授業で子どもの喜ぶ顔を見ることは、大変うれしく、自分なりの楽しみでもある。
- ▶ 他の潟の人とのつながり（市役所の方とも）。
- ▶ そろそろ止めようかとも考えていたが、潟研の積極的な様子を感じ、今後も自身の活動を続けていきたいと思う。季節ごとの潟の周辺の説明会を継続したい。
- ▶ これまでも新潟市レッドリスト作成などで、潟の生物相や潟端の暮らしを調べる機会があったが、まだまだ掘り下げが必要なことを実感した。自然環境も世代も大きく変化した。伝統的な暮らしを改めて記録する必要がある。
- ▶ 大型湖沼を調査することが多かったが、改めて小規模湖沼とこれらを含めた湿地のネットワークの重要性を考える良い機会になった。自分の研究テーマについても、これまで取り組んだことが無い内容にチャレンジすることができて勉強になった。

質問2 潟環境研究所の活動の影響

- ▶ 歴史・暮らし文化伝承資料としての記録映像制作では佐潟に関わる人も登場。漁協関係者などの貴重な資料となった。
- ▶ 福島潟だけではない視点～新潟を俯瞰し、その歴史、暮らしとのかかわりを塊としてイメージしていけるきっかけになっている。それを具体的に広げていくようにしていきたい。
- ▶ 視察・調査など従前なかったことが身近に行われたことから「潟が地域の宝」との認識が育ってきた。自治会ニュースに潟関連記事が載ったことなどもその一例だった。
- ▶ 潟が新潟の財産だと、さまざまな角度から気づかせてくれています。
- ▶ 水辺ネットワークさんに協力しながら、ひょうたん池の調査ができて感謝しています。
- ▶ 潟の話が出るようになり、他のメンバーも潟を見に行くようになった。
- ▶ NHK ラジオの早朝番組の新潟県レポーターを2か月に一回務めておりますが、担当の方に「新潟は潟や水辺に力を入れている」という認識をもってもらえた。
- ▶ 潟の水質改善への思い。周辺の草刈りや樹木の手入れなどに積極的な参加者の増加がみられる。
- ▶ 水辺の生きものを調べたり、その体験を市民や子どもたちに伝える活動は、NGOとしても以前から行ってきたが、潟環境研究所の活動を通じて進展できたと思う。潟に関する情報収集などの際にも、事務局からの支援があり、発表する機会を得たことは幸いであった。

▶ 地元で活動している人たちの繋がりができたことは大きな収穫だった。また、新潟市の職員と一緒に仕事をして、新潟市の環境行政に携わる人たちと意見交換ができるようになった。新潟市の職員に対する見方がプラスの意味で変わった。

(2) 所長による総評

3年間の活動実績、市民意識調査の結果及び関係者評価の結果を踏まえながら、当研究所に課せられた4つの役割に沿って総評を述べたい。

①調査・研究

当研究所の調査・研究テーマは、潟の自然環境をはじめ、歴史、文化、生業及び民俗など多岐に渡っている。また、研究所の活動は学識経験者、様々な経験を持つ地域住民及び複数部署の市の職員が参画し、横断的に展開してきた。このように多様な主体が関わることが、当研究所の特徴である総合的、かつ、中立的な視点からの調査・研究活動を可能にしている。

例えば、伝承資料として多くの地域住民の協力を得て制作した記録映像「潟の記憶」は、そのことをあらわす当研究所らしい成果であったと思う。

②ネットワークの構築

多角的な視点から調査・研究活動を進める上で、さまざまな関係者との連携が不可欠であった。客員研究員・協力研究員(学識経験者)、外部相談員(地域で活動する市民・有識者)及び兼務職員(市の関係部署職員)で構成する「ネットワーク会議」を定期的で開催した。3年間で現地視察も含め25回にも及び、濃密な議論と活発な情報交換が行われてきた。これにより関係者間で問題意識が共有され、連携が強まったと考える。

3年間を通して16の潟の人との関わりを調査していくなかで、外部相談員を19名まで増やし、所属団体との関係を築いてきた。さらに、記録映像制作を通して、潟端で暮らす地域住民とのつながりを持ったことも、大きな成果といえる。

しかし、研究員(学芸員)が任期付であり、庁内職員の異動も頻繁に起こることから、今後は構築してきた外部関係者との関係性を継続的なものとしていくことが課題である。

③情報収集・発信

研究成果の発信は、ホームページや刊行物の発行、シンポジウムの開催など、さまざまな媒体や機会を活用し、行ってきた。

平成26年度には、市内の潟に関する資料や情報をまとめたホームページ「潟のデジタル博物館」を開設した。誰もが容易に潟の情報にアクセスできる場となっている。ページ閲覧数は

平成27年度1年間で88,874、平成28年度2月末まででは99,961と、すでに前年度を超えている。閲覧者からは、潟に関する画像・文献資料の問い合わせが寄せられた。このことは情報を集積しわかりやすく公開した結果であると考えられる。

また、刊行物の中で特に高い評価を得たものが、「潟MAP」であった。平成27、28年度で各3万部作成し、市内の小・中学校にも配付した。潟MAPには16の潟群の水面積と水面標高を記載しており、本市の潟群を俯瞰して知ることができるようにした。子どもから大人までが気軽に手に取ることができるパンフレットとして評価を得ている。また、前述の記録映像「潟の記憶」は、「潟のデジタル博物館」での配信、市内図書館でのDVD配架、及びイベント時の上映により、市民が視聴できる機会の創出に努めた。

こうした情報発信は、3年間で築いてきた庁内外の関係者との相互協力関係に大きく依存している。当研究所の取り組みを関係者がそれぞれのフィールドに持ち帰り、周知を図ってくれる。そのことが当研究所の情報発信力をより一層高めてくれている。

④窓口機能

行政組織に属する研究機関として、庁内外の潟に関する活動の総合調整の役割を果たしてきた。事務局が庁内外からの問い合わせを受け、関係各所とつないでいくという体制が一定程度構築できたといえるだろう。

また、3年間で事務局として学校の総合学習への協力、職場体験学習の受け入れを行ってきた一方、関係者評価からは、学校での学習協力をさらに期待する声が寄せられている。今後は構築してきたネットワークを活かし、事務局員だけの対応ではなく、各研究員や外部相談員も含め、教育現場への協力体制を築くことも検討する必要があるだろう。

⑤まとめ

以上のように、3年間の活動実績と関係者評価の結果から振り返ると、多くの人々に良い効果をもたらすことができ、素直に嬉しく思っている。

関係者からは、当研究所との関わりを通して、「自身の活動の幅が広がった」、「他地域での活動を知ることで刺激になった」などの意見があり、それぞれの活動にとってよい影響を与えられたと感じている。

また、市民にとって当研究所の活動がどのように受け止められたかの一例を紹介する。平成28年度に実施された「潟めぐりスタンプラリー」(文化創造推進課)は、当研究所と関係課との連携の成果の1つであろう。1,000人を超える人々が参加・踏破しており、本市の自然環境を新たな視点で認識できた喜びが感想として寄せられている。

また、市民意識調査の結果でも、当研究所が設立され、行

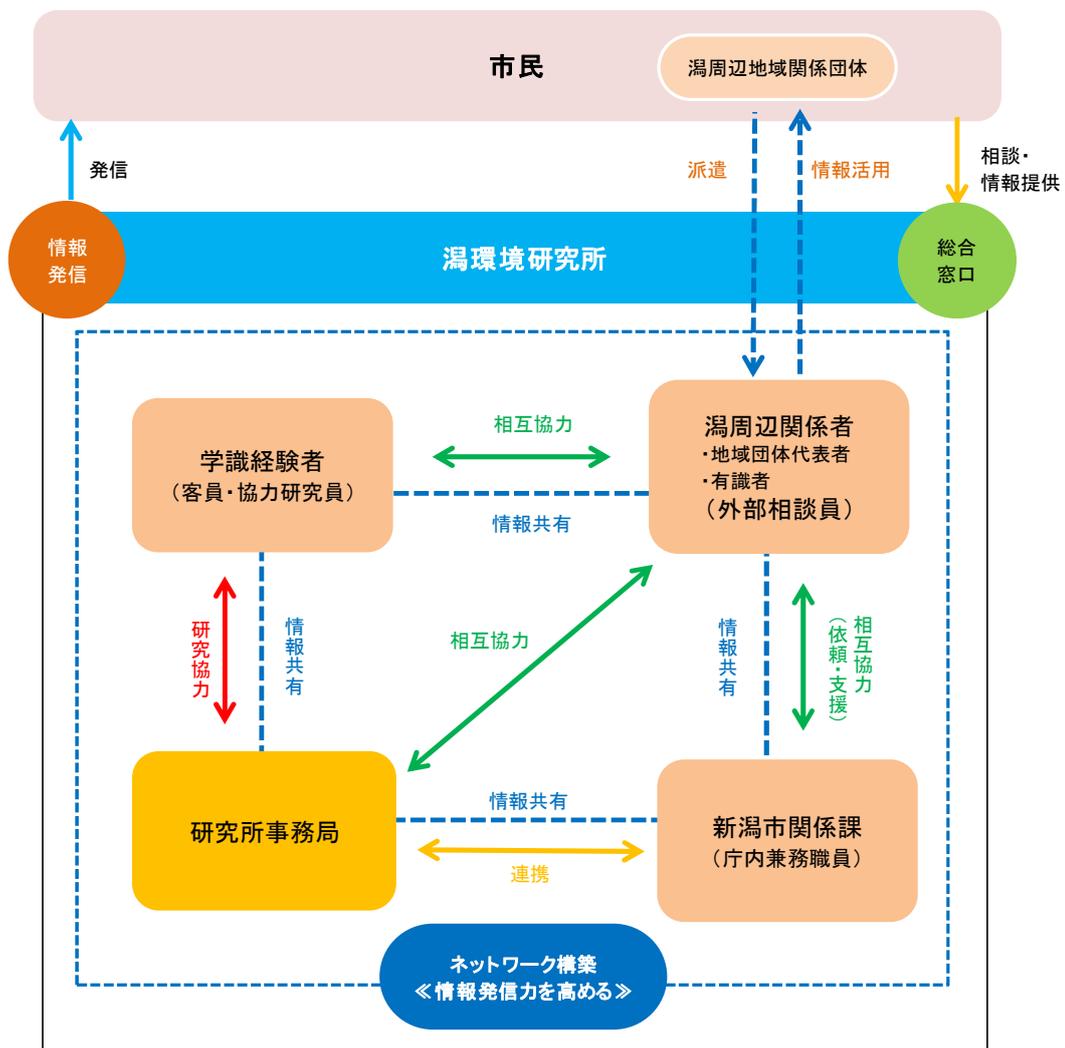
政が潟の調査・研究をすることに86パーセントが評価してくれている。このことは、当研究所の活動に対する期待の表れであると感じている。

3年間の活動により、多くの市民が身近な潟を単に知るだけでなく、残された潟群を俯瞰的に認識するとともに、潟と人との関係の変化を知る機会を提供できたと考えている。そして、今後、その関係がどうあればいいのかについて「気づき」が芽生えていると感じている。

かつて、潟と人とは生業を通じて濃密な関係性があったが、「水との闘い」の中で水を敵とみなしてきたことで、潟と人との関係は薄れてきた。しかし、潟の水質の改善などを通じて、再

び潟と人との関係性が取り戻されつつある。新潟市全域にわたってハクチョウなどが生息する特異な共生関係を有していることに気づき、21世紀の自然と人との関係のあり方として、そのことが再評価される時代になってきたといえよう。

これらのことを市民に対し継続的に発信することが当研究所の大きな存在意義であると確信している。3年間の調査・研究の成果として、本報告書の第3部で、21世紀における自然環境と市民との関係のあり方に関して、新たな提案をできるに至った。このことは、3年前には想像すらできなかったことであり、一つの成果と考えている



潟環境研究所が構築したネットワーク